主幹❖麻生路郎

# 川柳雜誌

## 五月號

大正十年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年九月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第六卷第五號

川柳雜誌社發行

## 六厘坊忌

▼日時　五月四日(土曜)午後七時
▼場所　南區日本橋一丁目交叉點
　北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼題「机」三句
▼會費　三十錢
　初心者の來會を大いに歡迎す

## 各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

# 川柳雜誌　第六卷第五號　目次


本社四月例會　橋本二柳子記
各地柳壇
新緑の興聖寺(表紙)　柴谷柴舟
題字　小出重
編輯後記　路郎・ひろし

### 感想・評論

乞食　川村花菱
唯我獨尊　岩本素人
或る日の感想　前田五健
いちねんぼ　桑原京郎
眞川柳に就いて　松盛琴人

### 研究・其他

「雨蛙」選句覺書　相元紋太
古句雜考　蛭子省二
川柳住吉御田　藤里好古
我觀川柳　三好革郎
山椒氏のこゝゞも　麻生路郎
南滿洲川柳の旅　大島濤明
月評　路郎　紋太　多聞　ひろし　山雨樓
川柳類題索引(三)　ひろし　加香欣女
川柳假の姿(五)　麻生路郎評　柴谷柴舟畫
漫畫　出口善治
三月の近作柳樽から

### 一路集(募集句)

雨蛙　相元紋太選
宿引　高橋かほる選
心中　西本三笑　北山梧郎　共選

### 創作

川柳塔　住田亂靴　岩本素人
高橋かほる　水谷鮎美
淺井冷々子　伊藤愚陀
松盛琴人　伊藤綠之助
松丘町二　酒井駒人
岩崎柳路　北山梧郎
中島鐵洲　朝田新水
橋本二柳子

○

中澤濁水　水田黃彩
中見光路　楊井二南
奥田雪緒　安西杏三

粒々集
富士野鞍馬　長崎柳秀
近作柳樽　諸家

# 近作柳樽

路郎選

一隅に女給かたまり最う一時　豐中閑生
輕蔑の極み叮嚀に頭下げ　同同
眞劍な妻の祈りに醉ひさむし　同同
丸髷の一すぢ垂れて淫らなる　同同
徒らにわが脛長く腰を掛け　同同
悠長な人が顏出す退社前　同同
妾になる氣年配を聞いてみる　神戸嶺月
嫂が煙たいばかり職が無し　同同
蒲團綿嬉しさうなる母を見る　同同
もの言へば涙の種の子を亡くし　同同
デパートで亭主赤帽程に持ち　松山大鷲
强盜の記事へ家出の子を案じ　同同
デパートで近所の店にあるを買ひ　同同
淺い川渡るに女仰山な　同同
二階からあそこらへんに雀の巢　同大阪
ふるさとの椿の道を夢に見る　同壽枝女
橋をはるかに大阪の夕がすみ　同同

## 病院風景

窓窓に鉢植あるも春らしく　同
出戻りの日毎夜毎に強うなり　東京　雨月
嫁き遅れらしくはかない戀が出來　同　同
受付も美人お客もいゝ　女　同　同
派手におし派手におしよもむごたらし　同　同
郊外の家賃に惚れる新世帶　尼崎　萬樂
母親の虫の居所子をたゝき　同　同
子の名前つけるにさても業々し　同　同
今の今まで疑うたものが知れ　同　同
もつこいゝ品をこ云へば身裝を見　神戸　志郎
月末によもやこ思ふここで逢ひ　同　同
南京虫いゝね枕の蕎麥の皮　同　同
催促に來たに信じて呉れこ云ひ　同　同
格氣かこ云へば馬鹿馬鹿しいこいひ　姫島　二竹
女湯の畫にならうがなるまいが　同　同
樣方こ書かれて淋し二階借　同　同
飯臺の脚がぐらつく睦まじさ　同　同
上役の機嫌は當てにならぬなり　同　鑾ヶ池　波紋
永眠へ今朝のお粥が殘つてる　同　同
如來より女が先に浮び出る　同　同
編物の夫人しみ〴〵子が欲しく　大阪　梢雨
貯めて居るらしい從姉の畫夜帶　同　同
獨樂廻すやうに下足は引つこ抜き　同　同

無心狀女房の產のこゝもあげ　大阪　善治
柔道の勝つたは帶を締め直し　同　同
苦勞したこゝも話して意見する　同　同
拜見の繪に水鼻をすゝりあげ　松山　白梅女
案外の機轉で嫁の怖れられ　同　同
死ぬ〳〵と云ふ養生を持込まれ　同　同
雨なれば芝居にしこくすしを卷き　大阪　竹堂
御得意で電話の有無を又問はれ　同　同
春が來た事が箪笥の中へ知れ　同　同
ねだるのを忘れてしもた虹の窓　大阪　テルホ
あの頃の事を又云ふ父の酒　同　同
呼び出した人の寂しい束ね髪　同　同
看護婦を家へ雇つて少しもめ　東京　賣茶亭
三角な店のつくりをほめそやし　同　同
狐雨病む子蒲團にうれしがり　同　同
かさだかいあるじにされて貴の風呂　大阪　毒仙
來世は男男のながしもこ　同　同
また產まされるかこ隱居口惡し　同　同
すきやきへ五人の無事な顏がより　大阪　露斗
末の子へみかんを二つもたすなり　同　同
ひこしづく水のすがたを見付けたり　同　同
もう片手こゞくに土手がくづれて來　平野　やなぎ
上京をいましめ兄は繩をなひ　同　同
ほうかむりしたまゝこけをぬいてやり　同　同

此頃の兄好きで飲むだけで無し　鳥取　聽松
遺族より佛の友が淋しがり　同　同
うまがつて水をのみしが其夜死に　同　同
あちらにも男が來てる女給の目　近江　たけし
定石通り來ぬ奴に負け　同　同
朝飯を抜きにしてゐる水入らず　間　同
新婚の兄さん少し馬鹿に見ゑ　松山　廣稔
辨當の蓋を開けるゝ船が見ゑ　同　同
先生は一寸時計を見て話し　同　同
三越のこゝも忘れて齒が痛み　大阪　豆秋
久濶の帽子をこれば禿げて居り　同　同
改札を出るゝ大阪灯が動き　同　同
氣に入つた帽子帽子屋から冠り　函館　竹二
確實に儲かる話酒が出る　同　同
血を咯いて死にたい銀のやうな砂　同　同
密談でない話にも紅茶冷ゑ　松江　紫吻
校正の係眼鏡をかけはじめ　同　同
國境の川も眺めの桃畑　同　同
麥の芽の青さ子供が二三人　丸龜　ゆずらん坊
ついたちの嬉しさ暗い夜具たゝみ　同　同
お馬鹿さんねゑゝ男はだまされる　同　同
その中のさくらが一人買つたきり　明石　啞聲
母親の命を取つて生れた子　同　同
來い來いゝ云ふのが伯父や伯母の辯　同　同

歸り馬車街を離れた唄になり　別　晃卓
御挨拶まだ奥樣は下げたまゝ　同　同
人蔘を心細くも二度煎じ　同　同
奢る氣の方はごつかで飲んだ色　大阪　陽喜亭
よく喋る連れに仲居の口を借り　同　同
遠山のかたちも父の骨に似て　同　神戸　鎌月
たばこふかせご三角形はさみしき　同　同
甲板の涙をボーイ見遁さず　德島　休歩
また金が男ひとりを失へり　同　同
ハンテンの印にみんな恐れたり　姫島　觀月
學歴のある監督をみな嫌ひ　同　同
總領の弱さを姉は來て語り　朝鮮　如空
上女中女の泪涸れ切つて　同　同
勞働の体驗だよと花を植へ　松山　雨眠
勞働の地下足袋も居て父兄會　同　同
マスクに眼鏡顔一ぱいの冬の朝　鷄ノ莊　普天
解禁のなんのかんのとバスの中　同　同
蔭ながらすまぬ思ひを弄び　大阪　不遇
友染を晒す飛沫と芥川　同　同
道を行く下駄の音にも春なれや　尼崎　吟女
口紅の毒々しさよ横をむく　同　同
いゝ仲居生れを聞けば京ごすゑ　堺　太路
金策になれ切る頃に金も出來　同　同
生み乍ら我が子に自由うばはれて　兵庫　香仙

運動會只容赦なく俄か雨　同
ごつちみち儲けにならぬ女の氣　神戸　柳川亭
驛までは小僧が送るホネムーン　同
母親の氣持にもなり腕をくみ　螢ヶ池　しげる
結局は金の重みに引づられ　同
看護婦の何に結ふ氣か洗ひ髪　螢ヶ池　湖舟
日光浴仕事の手眞似して見せる　同
食ふだけが仕事の樣な十八九　不明　松江
有難い六度六分で元氣出し　同
隱居する父を稼がす子の病　不明　一雄
あれ程に言つて叔父さん去んだきり　同
マーケット歸りの壽司を起きて食ふ　螢ヶ池　柳月
マスク掛けず來る嫂がなつかしく　同
妻の里下戸だ〳〵ミ褒めて居る　尼崎　虚白
午前五時早出の父の嘘なり　同
成行にまかす主人の寛大さ　大阪　里十九
もう檢査ほつ〳〵嫁もさがしませう　同
花名刺呉れたばかりに叱られて　石川　柳月坊
口計り上手にされる二度の母　同
辻占の合はぬ不滿をもつ仲居　高知　蝸牛
逝く春の袂の底を裏返し　同
服を脱ぎ〳〵手土産の中を言ひ　同　魚里館
言ひなりに買つて女ミ店を出る　同
二度の褄わが天性を知つてなり　松山　文芳
人形で見たい舞妓の白い息　同
女房が見れば不用な書架の本　西灘　楠堂

あなた〳〵あなたと朝の日曜日　同　同路
快樂の犧牲となつて訴訟沙汰　堺　清路
つはりとはしらずに一度醫者にみせ　同　同
病める子に親は折鶴並べ立て　大阪　樂鳥
朝詣り舞妓のねがひ京人形　同　同
酒の名と女の國を聞いただけ　神戸　とし雄
子の帽子案山子と成つて殘つてる　同　同
湯呑もコップもたしして客の數　大阪　四五磨
結立てを首すじ寒う歸つて來　同　同
まゝ母のじやけんが出世させて呉れ　大阪　沒食子
ためらつた話先方から聞かれ　同　同
御別れの明日は忘れて飲みませう　岸和田　樂亭
こわそふに眼鏡をかける女の子　同　同
もうとらぬかいと肩上げひやかされ　大阪　菊路
約束の帶はと妾手きびしい　同　同
見舞をだしに食ひに來るなり　松山　玄々子
石地藏やつぱり身投あると見ね　同　同
しゆうとへの氣兼泣く子に星を見せ　愛媛　たまき
自轉車は遊ぶ子供の方へこけ　同　同
棧橋へ着くと目と目でものを言ひ　松山　武子
手荷物を私が僕の船が着き　同　同
あの馬鹿に階級順で威張られる　朝鮮　東狂子
あの事をモガは遊びと云つてのけ　同　同
先斗町氷雨となつて妻を戀ひ　神戸　卯生
二日醉妻にあまへて缺勤し　同　同
腹を立てながらも局の窓で待ち　大阪　秋刀魚

姿見の前で眞似てる藝妓の子　同　大阪　時雨郎
ヨイトマケ休むと乳がぶら下り　同　同
おとなしい兄を親戚馬鹿にする　東京　狂車
打水と氣が付いて飛ぶ風呂歸り　同　同
折紙を折る指先へみんなの目　大阪　籠楓
惚れた事無駄であつたと思はれず　同　同
次の間も我等の如き二人連　長野　高峰
支那そばへ背中を丸く皆圍み　同　同
榮轉の寫眞に女中ほけて撮れ　福岡　不忘
出て見れば硝子を割つた兒は居らず　同　同
今日の雨我が早起のせいにされ　大阪　桂枝
永からぬ餘生と夫婦逆はず　道後　計加
右に行け左に行けと教へられ　不明　南柳子
新世帶他人の樣に三日たち　大阪　洗車雨
往診をポンと蹴られて雪に立ち　鳥取　穂波子
情夫なぞ出來て辻占面白し　大阪　幸泉
糸卷の行方に炬燵立たされる　神戸　繁喜代
病人があり押し賣へ荒い聲　大阪　雪峰
すれ違ひ此の女にも氣取らうか　名古屋　草石
ポケットに錢鳴らす兒を見送つて　大阪　丸葉
こんぞ來た母はどこかで見た女

菖蒲祭

聞きされて口にくはゝし柏餅　東京　石涯子
やもめ一人の家にも鶯鳴いて居り　京都　愛子
ひと粒の米へ姑の眼が光り　大阪　つばさ
女店員見合の客と知らずして　京都　折草

看護服ぬいで女中さあやまられ　大阪　道太郎
百貨店景氣程には賣れて居ず　尼崎　秀聲
なた豆でデン〳〵太鼓ポンさ打ち　大阪　沐天
青空へ雲雀のねさの遠過ぎる　京都　双光
三笠山疲れた街の灯を眺め　大阪　江帆
日曜日社長畑の人さなり　堺　松風
あの社長堅い〳〵で通つて來　大阪　英賀夫
資本家になれば心も變るらむ　和歌山　光哉
嫁いぢりせぬ量見で嫁を取り　大阪　黑天子
失業の疲れ手紙も書き飽きて　松山　青帆
靴磨きする人させる人の顏　大阪　卯三
唄ひたまへ君蘆の葉がゆれてゐる　島根　花情
口だけは強く云ふのが母のくせ　大阪　山茶花
白粉が目に附く程の年さなり　豐橋　綠雨
別莊の裏に寫生の子が歌ひ　大阪　狂雨
トランプの切りやうも知り戀も知り　京都　潮多浪
朝風呂の心安さは名も知らず　大阪　好綠
戀人が出來て餘分な金がいり　金澤　たしろ
エレベーター長い言葉を子は覺ね　大阪　勇宗
俺の居るこは浮世の見ねるここ　盤ヶ池　湖舟
雨らしい音に丹前飲みつゞけ　大阪　明果
禮儀作法等で自由になれぬ人　盤ヶ池　皎月
二日酔又々禁酒口に出し　大阪　晴二郎
失職の今日も昨日も花の下　松山　極光
盛り場で煙草買ふのを忘れて來　大阪　鯉友

**祖母の死**

せめてものなぐさめは寢入る樣でした　福岡　假名子

南禪寺霧の深さで鐘をきゝ　大阪　賀名芽
電線がジージッと鳴り身がしまり　朝鮮　花蝶
空ら電車ゼリービンズがこぼれて居　大阪　五輪
嘘だとは知りつゝ下役こびを賣り　島根　專路
待ち合はすのに廣すぎる交叉點　大阪　精一
鐘一つ長閑過ぎたる奈良の町　神戸　市公
モーニング鹽を待つてる家の前　大阪　悟空
辯解も出來ず啞の子うなだれる　島根　樂山
忌の字も細く旦那の死んだ家　大阪　池邊
藪入がなつかしく見る寒牡丹　西宮　南窓
なぶられた事も知つてる兎がり　大阪　一柳
極樂とんぼ疊の匂ひかな　豐中　石竹
まだ出來ぬ子どもの玩具買うて居る　大阪　暑岐
森の夜の震へが包む我家の灯　金澤　木偶人
面はゆう中山寺に參つて來　大阪　鶴峯
炬燵から出澁ぶる父へ膳が出來　金澤　今雨
金貯めて居るかと父の便り來る　大阪　俊烈
水鐵砲空家の壁がまとになり　鳥取　佳水
身の上を語るに女給足拍子　大阪　喜由
もの云へば損する樣に二等客　大石　强
針箱へなをせし子らの貯金なり　大阪　靜香
階段の音娘とは思はれず　金澤　好次
背比べの柱のしるし虫が食ひ　大阪　貪鬼
此まゝに後家で通すと祖母の前　神戸　柳村
その次ぎの孫から少し邪魔がられ　大阪　吐句
サイレンに誰はばからぬ金時計　同　天絲坊

# 乞食

川村花菱

乞食の子大人のやうに頬がこけ

こんな句をずつと前によんだ事がある。私は乞食が好きだ、好きと云ふのも、我々と同じ種類に屬する人間のある生活として眺め、考へ、見つめる事が好きなので、乞食と友達になると云ふ風な事が好きなのでは無い。

私の育つた田舍には、乞食阪と云ふ阪があつた。そこにはいつも〳〵多くの乞食がうよ〳〵して居た。代表的貧民窟の鮫ケ橋から上つて來た所だつた。變な名であるが、俗稱がいつか個有名詞になつて、どんな人がどんな場合に云つても、少しもいやな感じのしないまでに田舍の人々にはその阪が聞なれたものに成つて居た。

元は、墓地の行きかへりや燒場のそばには必ず多くの乞食が居たものだ。團長格は、手製の箱車などに乘つて一群を統一支配して居るやうなものもしば〳〵見た。が、今は本當にすくなくなつた。

往來をなほすのに、片側づゝ往來ぢめにしてなほして居る。その道ぶしんの仕事は、東京ではどこでも長くかゝる。去年からなほして居る新宿の京王電車の停車場のうらから、新宿一丁目へぬける往來はまだ完全しない。燒いた枕木の柵のそばは、いろ〳〵の石がつみ重ねられて、道は車の通らないやうになつて居る。私はそこを毎日のやうに通るのだが、いつとはなしにそこに乞食の一群が集まつて仕舞つた。はじめ、そこで火をたいて居る人々は、道ぶしんの人足かと思つて居たら、それ等はみんな乞食だつた。乞食と云ふより宿なしと云ふ人々の群だつた

石と石との間に、むしろなんぞしいて、そこに横になつてもぐり込んで居るものもある。戸板のやうなものをのせて雨露を

しのいで居るのもある。陽のあたる時に通ると、よく上半身だけ、まつぱだかになつて、着物など整理して居るものもある。何もしずに只じつと考へて居るのが多い、私は此の考へて居るのを見るのが一番さびしい。

銀行の段に乞食と乞食居る

新宿のある銀行の、かたくしまつた鎧戸の前の段に、いつも乞食が寢て居る。ある夜、見知り越しの髯のある乞食の他に子供をつれた俄乞食と云ふやうなのが來て居た事がある。と、先から居た男は

手前たちの來る所ぢやねゑ……己れの家を何と思つてやがる

と云ふ風な顏をして新米のものを見て居た。しばらくすると新米は、そつと荷物の中から食パンのきれを出してだまつて手をのばしてさし出した。すると古參はそれをちらと見てこれもだまつて受取つた。新米はこれで安心したやうに、ほんの少し石段のすみにのり出して腰を下した。

さうだ、一寸か二寸位なら、石段の上のつてもいゝや

と云ふ風に私には見えた。二人は、決して話なんぞしはじめなかつた。さびしくないのか知らんと思つたりした事がある。

四谷の山の手劇場の横に大きな大きなゴミ箱が二つある。客席その他のゴミを入れるらしい。三月三日、私の佐倉宗五郎が上演されたので少し早めに出かけると、ゴミ箱の前に三人の乞食がしきりに中をさがしながら、お互にはなしをして居た。

三日目にしちやあ、何にもね……

私は大變面白かつた。芝居は明日にないと乞食は思つて居たのだらうところが、一日二日は、浪花節で、まるで入りがなかつたのを、私は稽古に行つて知つて居た、何となくユーモアがあつた。

それからしばらくして、私はすばらしいものを見た。それは前に云つた、京王電車のわきの一群の住宅（？）に鏡を發見した事である。その鏡は細長い柱かけの鏡で、それが、枕木の柵に赤いひもがついてかけてあつた。

あゝ、鏡がありますよ

と私の家内は云つた。見ると成るほど……光つて居た。

私はとてもよろこんだ。鏡はうれしかつた。

一體何をうつす氣なんでせう？家内はまじめに考へて居た。私は、考へない方がいゝんだと思つたが

乞食つぷりのいゝ所をうつすのさ

と淺薄なしやれを云つた。本當は私一人で通つて私一人で發見して考へて見たかつたと、それだけが殘念だつた。

震災直後と云へば、だれも〳〵乞食のやうだつたが、それでも本當の乞食らしいのが、眞新らしい扇風器をあぐらをかいた前へ置いて、只じつと眺めて居たのを見た事がある。

今日は雨が降つて居る。それから又その道を通つて、山手劇場の千秋樂に行くのだが、みんな何をして居るだらう……。

# 南滿洲川柳の旅

……句行脚……柳壇訪問……

大島濤明

## 五龍背へ

久々で南滿各地の旅に上る。

夜行で大連を立つて一路安東に向ふ。安東縣の少し手前に五龍背といふ安奉線隨一の温泉がある。差當りこゝに草鞋を脱いで一風呂浴びることにした。

旅疲れ湯槽の中で取り戻し
冬もまだ醒めぬ如月の中ばとて浴客も少くガランとしてゐる。それに此處は只温泉の五龍閣一軒しかないので、内地の樣に下町風な温泉氣分は更に味はへないこんなことなら安東から藝者でも呼べばよかつた、なぞ柄にもないことを言つて見る。

湯女もゐず冬が淋しい五龍背
仕方なしに何度もくも湯槽に浸つて一夜を明かした。翌朝出立といふ間ぎわに安東から玉田苓草君が電話をかけて吳れる。

安東の所用をすまして新義州見物に出かけた。八尺餘も凍つてゐるといふ鏡の樣な美しい鴨綠江の氷上を橇で渡る。

この邊の深さを思ふ橇の上

## 新義洲

新義州は朝鮮の國境であり日本の國境である、と云つた感じから何となく懐しさが湧く。川一重距てゝ安東縣と新義州とはまるで違ふこゝには柳友、井上竹大谷米の家、杉鬼雷の諸君がゐる。本町常磐町あたりをぶらりくゝ歩きながら、大谷君のうちはどの潔かな、碌竹君はどこだらうと餘所ながら見廻つて行つたが判らなかつた。勿論同行者などの關係から訪問する譯にも行かなかつたのである

何の氣もなく國境を走る汽車

## 安東縣の夜

用務方面での私達の歡迎會は安東の料亭由良之助で開かれた。由良之助は筏節踊りの宣傳に力を盡してゐて、抱ゑ藝妓で組たてた一團は大連にも時々やつて來る。こゝの庭は滿洲に珍らしい拵ゑで老

松、苫石などが部屋毎に造られて日本にでも歸つた樣な氣がする。又由良之助の新館二階の便所は格別な趣きで、小便所手洗鉢共に趣向をこらし、殊に大便所の窓戸棚の襖には戀情こまやかな春畫が書いてある。

はゞかりに憚りがある由良之助

宴會の央ばに苔草君が迎ゐに來てくれたので國境川柳會へ顏出しをした。そこは東田荷村君經營のカフエーである。鬼塚三州、杉鬼雷、大谷米の家、門原和水、島本周南、丸山鶯居、東田荷草、小野原石楠の諸君が待つてゐて呉れた。出發がその夜の十時だつたので句作の暇もなく只『柳壇の近狀並に川柳の傾向に對する各自の態度』に就いて一場のお話をしたゞけであつた。私は旅先きで柳友と語る程樂みなことはない。

## 奉天撫順へ

二月十九日奉天へ引返した。車中安奉線の風光を眺めつゝなごいふと大變景氣がいゝ樣であるが、冬枯の滿洲では何處も殺風景である。汽車が本溪湖に着いたとき、ごや〳〵と乘客が這入つて來た。そのうち薄汚い苦力體の支那人が一等車を通りぬけて我々をさも羨ましそうに見廻しては三等車へ行つた。實際彼等から我々を見たら定めし羨望に堪ゐないであらうが、しかし、彼等は彼等階級なるが故の氣安さ、樂しさは自覺してゐないであらう。

下民皆己が世界を味はず

奉天附近平原からの日の出は誠に壯嚴なものである。廣い〳〵何の障害物もない大陸への旭光、

妨けもなく平原の陽は上り

奉天城内の滿鐵公所へゆく途中宮殿の跡を一と廻りして古跡をしのぶ。

宮殿の歴史を持ちて建ち腐れ

撫順に來て露天堀の狀況を視察した。あの大きな古池のやうに黑ずんだ地の底からクレーンやトロクーの音騷がしく何百萬噸の石炭が掘出されてゐる。

一滴の汗を積み込む運炭車
鶴嘴の先きから汗の火を發し

## 哈爾賓情景

三月十九日ハルピンに着いた、まだ寒いだらうと想像してゐたので案外温かである。六年前に來たときはまだ露西亞の餘勢が殘つてゐて、鐵道守備にしても、交通巡査にしても凡て露西亞人ばかりだつた。ここに驛頭には赤髭の露助馬車が何十臺となく列んでゐたのに、今度は一臺の馬車もなく數十臺の自動車がずらりと列んでゐた。

夢ばかり抱いて白系露人生く

鐵道を守備する兵卒でも、交通巡査でも十六、七しか見ゐない若い者ばかりである。その可愛らしい巡査が童顏に威嚴を加ゑて左へ！右へ！手を擧げて寔に簡單に交通整理をやつてゐる。

童顏へキリツと警官辻へ立ち

街の辻々には髭ムクシヤな白系露人の落武者が靴磨きをしてゐる。風姿堂々世が世であつたら、一軍叱咤した將帥であ

つたらうにと同情する。

靴磨きアレキセーフの様な顔

ニッツアのレストランに這入る。幾多の觀客は更けてゆく冬の夜をウオッカの醉に浸りながら歌ひ興じてゐる。『裸踊りなんて馬鹿な！』と言つてゐるがハルピンに來た者は大低一と晩は睡眠不足の勉強をして歸る。

性慾と裸踊へなごむ好奇心
口紅の炎に憾む男共
歡樂の痴事に更けゆく赤い幕

松花江の凍結氷上へ自動車で行つて見た。鴨綠江の氷上は鏡の樣に綺麗だつたが、松花江上は凸凹多く陸上見たやうである。對岸からの自動車は引つきりなしにやつてくる。

氷上に立つて地獄の釜の蓋

## 長春の柳人

驛頭には鈴木、中野、池田、松見・平松の諸氏が待つてゐて呉れた。此處の柳壇建設の功は中野柳陽氏の主唱によるが其實際に於ける功勞者は何んといつても鈴木星廼家氏であらねばならぬ、と皆が言つてゐた。ホテル食堂で歡迎會が催され、田中芬君、星廼家君、富澤君、雪僧君、菱明君、磊笑君、豚里君、柳陽君の數氏で宴を終へて星廼家氏宅での句會に臨んだ。長春の柳人は誠に親切である。初對面の方々ばかりだつたが、何れも深い印象を刻つけられた。

洪水へ落葉素直に流れゆく
切株の危く過去を持ちつゞけ

これは當夜拙作である。

## 鞍山

前夜は奉天の料亭粹山で用務關係者の歡迎會が催され松岡滿鐵副社長がよく唄ふ木曾節を、江戸ッ子藝者の文彌ねーさんに聞かされ

桑の中から小唄が洩れる
小唄きゝたや顔見たや

四億の大資本と三萬の社員を有するあの松岡さんもこの唄をうたうときは陶然として可愛いゝマーさんになるんだと文彌はさんざ褒めちぎつてゐた。

文へ恨みを數々書いて
彌々つのる戀心

これは卽興として彼に與へた都々逸である。さいつた宿醉のまだ醒めもせぬに鞍山柳人たちは大勢で歡待して呉れる。こゝは滿洲各地のうち川柳派への纏つての信者ばかりで、水光、鐵坊、榮八、銀糸、可樂、龍史、鼠堂、仙峰の諸豪が草明の先達によつて愈々健闘をつゞけてゐるのはほんとに嬉しいことである。安東—新義州—長春—鞍山と各地の柳人を訪ね、各所の風光に接し、心ゆくまゝ愉快な旅を續け、三月二十一日やつと旅裝を解いた。此の機會に各地の柳友に謝意を表するものである。

やむを得ず朝日をのんでゐるうちに朝日でなければならやうになつた。近頃朝日がないので不愉快だ。モノポリーといふことは時ならぬ憂鬱を與へるものだ。考へさゝれる。

（タバコニストゝ路）

# 月評（前號）

路郎　紋太　多聞
山雨樓　ひろし

近作柳樽　山雨樓提出

## 盗人に風呂屋のしまふ桶の音

紘調子

**山雨樓**……川柳にはどうも斯ふした面白味がすて難いやうだ。例へそれが頭の中で考へ出され或は搾へ出された場合でも人のおとがいを解かしめる所以のものは一つに此面白さであらふ。併し眞劍に川柳の事を考へると左うした搾へ事には味が薄くなる事を否定出來ない。輕るい氣持の内に或る切端詰つた感じが出てゐれば面白い句だと思ふのです。この句は戯作的な句ですね。

**多聞**……斯ふいふ「盗人」といふものを捉へて川柳に纒める事はかなり厄介な事だらうと思ふ。さういふ雛をうまく仕こなしてゝすんなりと纒めてゐる手際には敎へられるところがあると思ひます。

**路郎**……これはかなり大きな問題だと思ふ僕も山雨樓氏の説に同感してゐるものであるが、今のところで川柳といふものゝ範圍をさう極限して仕舞ひたくないと思ふので此句の餘地を存して置いたわけである。つまり創作と大衆文藝と云つたやうな行き方の句を兩方とも認めて一つの誌上で發表してゐるといふ譯であつて大衆文藝のやうな作品に對しては藝術的價値が第二義的であつたり或るは多少稀薄であつても、併し全然價値が無いとは云はれぬと云つた樣な點から近作柳樽は目下の傾向で選句を續けてゐるのである。

**山雨樓**……此句の藝術價値を何處まで認めていゝかと云ふ事は、初心者にとつてはかなり聞きたい點であらふ。初心者が川柳に這入つて行く道程には此句の樣な世界が餘りに多く目について、例へば課題吟なぞに於ても秀逸の句として選せられた場合に於ては斯ふした句が川柳のすべてを物語つてゐるものと早合點する場合が多からふと思ふ。今路郎氏の述べられた事柄は勿論目下の狀勢としては止むを得ぬ事と思ふけれども、こうした問題はも少うし鮮明に解決をして置かれたいと思ふのです。

**路郎**……それに就ては僕は川柳雜誌の第一卷以來度々述べてゐる事柄で僕の書いたものを讀んで居られる方は充分會得されてゐる事と思ふてゐる。と云ふのは第一卷に雜吟の作り方といふのを述べてゐるし そこでも川柳といふものは題を出して作る可きものではない。といふこと其他川柳を作る上の作句態度に迄論及して度々述べて來てゐるのでこゝで又々それを繰返す必要はあるまいと思ふ。絶えず新らしく生れて來る作家でゝさうした戯作的な句に興味を感じるといふのは川柳雜誌の近作柳樽の句や課題吟の中にある、此種の句に興味を持つといふよりも川柳といふものは斯ふいふものだと云ふ概念を先入主として他の方面から這入つて來られるので其ために川柳雜誌の句に接した場合に自分の考へて居た、川柳といさゝか違つたやうな感じを懷き他のどうしても從來の句風に興味をもつ作家はさうした方面の句を主にしてゐる雜誌へ移てしまうが、こゝでそれ等の作家を一時とゞめて研究の餘地を與へて行くためには今直ちに劃然と區別をたてゝ打切る事は出來ない。從來自分等がやつて來た「雪」や「後の葉柳」の如く、純藝術的に精進すると云ふ方針のものなら何の用

捨もなく捨てゝ顧みないのもいゝが「川柳雜誌」としては川柳の社會化を說き川柳を一般に普及せしめやうといふ機關として一つの使命をもつてゐるので 先づ其の作家を此雜誌に寄らしめ 其の中から漸次我々の主張の方へ歩み寄らせるより 仕方がないと思つてゐるので 以前にも能く書きもし話も仕た事である。課題吟で天に拔けたとか、右に述べたやうな戯作的な句がよくあるから それが川柳のすべてであると思つては ほんとの川柳家にはなれない。課題吟は作句の練習である位に考へてゐて貰ひたい。從つて各選者には誠に手數をかける譯である。

紋太……すると結局 此句は面白いけれども つまらぬ句だと云ふ事になるのですか。このまゝではいけないと云ふ事に歸着するのですか。

山雨樓……つまらないのではないのです。川柳にはこうした 面白味が捨てられないもの切つて放す事が出來ないものだと 云ふ事は認めるんですが併しさうした句を 川柳の最後のものとは思ひたくないと 云ふまでゞす

紋太……併しこれが 最後のものでないといふ事は又別の問題であつて 此句の持つ面白味を藝術的に生かし得るならば 此句として立派に生きて行ける句だと私は思ひます。

山雨樓……そこのところをもつと力强く生かす事が出來ませんかネエ。

多聞……私の思ひますには多くの人は 山雨樓氏が「最後のものと思ひたくない」と云はれてゐる、その面白くない方の句の面白味が川柳だと信じて 這入つて來るんであらふと思ふ。さうして暫く續けて居る內にそれだけでは飽き足らぬ時機が到來する其時「川柳雜誌」の主張なり使命に自然合致して來るのではなからふか。

山雨樓……つまり自分の考へは餘り 突き詰めて居るんではなからふかと思ふ。徹底しなければ滿足出來ないといふ 考へ方をして居るかも知れない。

紋太……私は この句が單に面白いだけの句ではない樣に感じるんです。

多聞……それは同感です。

紋太……盜人と云ふのが 此句をよむ私自身を指されてゐるやうな感じがする。勿論實際に人の外觀を見て盜人と斷定が 出來るものではないけれども殊更に「盜人」と云はれて見ると それが拵へた盜人といふ事の面白味だけでなしに、風呂屋の仕舞ふ時刻に何か用ありさうに 其處らをうそ〳〵として居ると云ふ事が、何んだか自分を指されてゐる樣な感じがして 一面に辛辣な句だとさへ思はせられるのです。だから單に面白い句だ、おかしい句だ、とこんな程度で止まつてはならないと云はれる說には同意仕兼ねる。

（此時ひろし氏出席）

多聞提出

## 力あまつてトンカツ皿を出る

高峰

多聞……私はいつも斯ふいふ 何かむづ〳〵した嬉しさの漲つた句が好きです。こう云ふ言ひ方を或は嫌ふ人があるかも知れぬが 作者の態度がピーンと頭に響く 句をなるだけ推賞したいと思つて提出しました。

路郎……若さがよく出てゐると思ふ。

紋太……此句は成功してゐます 事件は少さいです けれどもそれと表現とがピツタリ來てゐるから斯ふいふ 句を成功した句だと私は云ひたいです。

山雨樓……僕は詩味に乏しいと思ひます。

紋太……さう云ふ點もありますね。併し僕は此人が言はんとしてゐる事を 充分に言ひ得て居る事を認めて之れで好い句だと思ふ。

山雨樓……自分の思ふ事を人の 共鳴にまで訴へるにはもつと感激のある內容を 求めたいと常々思つてゐる。

ひろし― 可なり此作者は感激してゐる。安洋食屋の貧弱な トンカツに飛びつく程の食慾を持つてるといふ事がハツキリと分る。

路郎……それと同時になんだか 自分で自分を嘲ける樣なおかしさが 湧いたのではないか。詩味に乏しいと云ふ說があつたが此句の詩味は 其處まで深く立入らなくてもよからふと思ふ。假りに從來の歌と啄木の歌とくらべて何んだか啄木の歌が從來の歌よりも 下品で詩味に乏しいと 言つてるやうなもので此等の畑が强張されて來たら、詩味に乏しいといふ言葉は問題にされなくなるかと思ふ。併し句によつてはさういふ 言葉は充分に云ひ得られる。

多聞……此句に詩味が 加はるとこれだけ奔放に自由に 此句の持つてゐる力强いものを現はす事はとても出來ないだらふと思ふ。

川柳塔　ひろし提出

## クリームの淡さも冬の朝の戀

愚　陀

ひろし……掲載されてゐる五句共初い〳〵しい淡白な句である。此句は戀心を覺えた乙女らしい氣持にふさはしく表現されてゐて清新な感じを與へる。

路郎……戀の句にしては弱いと思ふれ。

山雨樓……僕は氣取てると思ふ。

紋太……叙法に餘所〳〵しさがある。

多聞……そりや寒い冬の朝だからだ。春の宵などであればこんなんでもなからふと思ふ。

紋太……時季の事ではない。冬の朝でも叙法によればつまり眞實の感激によれば そんな缺點は無いと思ふ。

路郎……勿論さうです。

ひろし……其の點は提出者も認めます。併しこれは適齢に達せぬ作者の夢であつて 思春期の戀心を咏んだものとして 當然淡くて寧ろ稚ないのがふさはしいと思ふ。

路郎……然し 此の淡さと云ふのは「クリーム」の淡さで戀の淡さをいふてゐるのではない。

ひろし……無論クリームの淡さではなく 句全体が非常に淡い印象を持つてゐる。

路郎……其淡い印象を句にしたために 感激がそれだけ足りなく從つて、句の價値が底下した譯だ。年の若い人の戀でも感激さへ強ければ「モット」緊張した句にならなければならん。

ひろし……つまり 其の戀が此の句の表現の程度に淡い戀なんである。

山雨樓提出

## 掃除せぬこと貧しさの一つなり

新　水

山雨樓……日常斯ふした 考へに耽る事が往々にある。それを卒直に云ひ放つた、句主の苦惱に深い 共鳴を覺えます。此句は面白おかしく解すべき 句ではなくして句主の感傷に滿ちた暗い心境に打たれながら 靜かに味ふべき句であると思ふ 我々が我々の生活をふりかへつて 見る時 こうした淋しさに襲はれつゝも、尙一歩退いて詩の情感にまでも甦へらす喜びに生きたい。此心持を以て句作に精進する事は川柳をより 藝術的にならしむる上に於て肝要な道筋だとおもいます。

ひろし……新水君は非常に裕福で 山雨樓氏の云はれるやうに貧しい 暮しをしてゐる人ではない。隨つて此の句は他家の貧しい家の事を咏まれたのではないか。さういふ風に此の句を味ふて見ると又 其處に異る意見があり はしないか。併し「貧しさの一つなり」との表現は非常に巧みである。

紋太……ホホ……。僕は反つて卒直な句で無い樣に感じる。殊に「貧しさの」と說明された事が此の句を 誇張りいけなくしたやうに思はれる。

多聞……私も此の句は表現に於て 遺憾な點があるやうに思ふ。山雨樓氏の仰しやつた突き詰めた氣持が漲つてゐるのであれば 今少しく現はす方法に苦心を望ましく思ふ。斯ふ何か個條書きみたいな、何々せん事 其の一ツ、掃除せぬ事貧しさの一つ、と云つた樣に……特にひろし氏は「貧しさの一つなり」といふ表現を推賞されてましたが……それには私は同意しがたく思ふ。

ひろし……此の句を前述した 樣に他家の事と思ふて見れば此の「貧しさの一つなり」との斷定した見方が 大變利いて來る、それを私は巧だと云つたのである。

路郎……僕は此の句は 叙法が主觀の形をとつてゐるので何處までも主觀句として 取扱ひたい。お話によると新水君が決して貧しい人ではない、とのことであるけれども貧しいとか貧しくないとかいふ事も 相對的でなく主觀的に 云ひ得られると思ふ。本來は貧しい、貧しくないと云ふ事は 相對的のものであるかも知れないが 僕は貧しさと云ふ事に對しては或る特定の金額で決てゐない。心の貧しさを感ずる事もあるし、物質の貧しさを感ずる事もある、假りに壹萬圓の金に滿足を感じて貧しくないと考へてゐる人もあれば、それ位な金でブル的氣分を 旺溢さして居る人もあるかと思へばそれだけの金に對してなほ 貧しさを感じてゐる人もあるので此の場合、此句は新水君の主觀句として 僕は面白い句だと思つてゐる、

山雨樓……僕は其の心持が 尊いのだと思ひます、川柳を作る事が工藝品を作り出すやうな巧みさに捉はれ過ぎて、自分の僞はらない

感じを表現するといふ尊さに氣付かないならば、其の川柳は所詮文字の遊戯として終らなければならぬ、勿論川柳としては鋭いそして深い感興の許に生れたものである事を要するけれ共詩として藝術として川柳の存在を強調するには斯ふした僞らざる感情の表現を尊重して行かなければならぬと思ふ。

紋太……言葉を返す樣だが心を尊重する意味からいへば此の句に對しては云ふ可き必要はないけれ共觀賞者としての立場から言へば其の心をこつちへ傳へて吳れる表現上の事に就て云ひたくなる場合がある、其意味で此句が貧しさを露出した手法に惜しむ可き點がある事をも一度私は云いたい、唯それだけです。

多聞……紋太さんの仰しやるやうな事になりますが、たゞ自分が作つて自分が見るだけのものであれば表現法にさまで苦しみもすまいが矢張り役者となつて舞臺に舞ふ場合には如何に其氣持を見物人に呑み込ませるかといふ事に力をそゝぐ事になるんではないでせうかね。

路郎……嚴肅な作者の心持を卒直に投げ出してゐるので此の句の價値は充分だと思つてゐる、つまり僕よりも貧しい豚の樣な生活をしてゐる人でも無感覺で過して居る場合と、其人よりも物質上には多少共惠まれてゐる僕が自己反省をして其貧しさを嚴肅な氣持で眺つたとするならば、それが一つの詩である。さう云ふ點から此の句を推賞してゐるのである、併し句としては此の句より「冬の足こうまで白いとは知らず」の強い句に刺激を與へられる事が多い。

路郎提出

## 笑はせて功德したよな顏でゐる

京　郎

路郎……皮肉な句だネエ…、うまい句だと思ふ。

紋太　場面が「ハツキリ」しないと思ふ。

路郎……此の位ひ出て居てですか。

紋太……句が停止してゐる。

路郎……僕は動いてると思ふ。

紋太　そんな事はない、それは終いの「ゐる」といふのでも分る、なぜ「ゐる」と止めてしまつたのか、もつと活躍させて欲しい。これだつたら唯の皮肉に終つては居はしないでせうか？

路郎……「ゐる」と止めてゐるからその内容が浮き出して動いて來るんである。

紋太……可笑しいな。

路郎……笑はした人が同時に笑つた時には其喜劇は失敗に終る、笑はした人が笑はないで而も功德をしたやうな顏をしてゐる、そこに無限のユーモアが首を擡げて來るので其皮肉も生きて來るのである、此句のやうに投げ出した描寫こそ本當に其の句を生かす手段に成功したと云へるのである。

紋太――僕はさうは思はぬ。それだつたら、「笑はせて功德したよな顏」だけで其意味は充分に分る。後の「でゐる」は生まぬるい作者が出てゐる丈けだと思ふ。僕だつたらば斯ふ云ふ句体の場合は「顏で寢る」といふ式に此句をもつと働かせて其効果を有効にしたいと思ふ。其外には云ふ事はない。

ひろし……僕は低調だと思ふ。

山雨樓……僕も同感ですな。

多聞……ピンと來ない。

路郎……僕は低いといふ言葉に對しては同意仕兼ねる。兎に角現はれたる文字が低さを感じさせるのであらうとは思ふが、從來こうした境地をこれほどまでに咏みこなしてる作に接した事がない。それから紋太氏の「顏で寢る」といふ風に云へば變化は生じるけれども此の句は單に「功德したよな顏でゐる」事の其面白味を提へたのである。「顏で寢る」と此の句との價値の差は別である。

紋太　路郎氏の云はれるほどの強さを出さうなら、私だつたら「顏かな」ときどつて云ひ放つてやる。

路郎……そりやあ面白いね。

……編人筆記……

# 唯我獨尊

岩本素人

人間の顔の形はと申しますと卵型であると言ふのであります。卵の細い方が下に成つて中央に鼻がある。これが人の顔の本當の形なのであります。顔の定石であり、標準なのであります。ところが此の卵型であるべき筈の顔がどうした譯かあまりに卵型でなさ過ぎるのが甚だ多いのであります。私の顔などが此方の好標本であります。廣い大阪の町々を歩きましても電車に乘りましても卵型の顔に出會ふ事は殆んど無いのであります。だがよく考へて見ますと皆が定石通りの卵型では大に都合が悪い。田中首相も濱口總裁も乃至熊公も八公も同じ卵型だとすれば、これでは第一漫畫家が困ります。漫畫家の切込む隙がないからであります。漫畫家の困るのは暫くかまわないとしてもお互人間同士に取りましても甚だ變化のない沒趣味な次第でありますが、幸ひにも十人十色、皆が皆まで變體的の面貌を掲げて居ると言ふ事は人類御同樣に慶賀に堪へぬ次第でありまして、これでこそ私共は生き甲斐を感じたのであります變體なのはお互の容貌斗りではなく、心持ちも境遇もすべてがそれぞ〳〵變つて居るのであります。卽ち變體が此世の常態なのでありませう。之れを時間について觀ましても、昨日と今日とは同じ日でなく、一年前の今日と今日の今日も同じ日ではありません。前後の一時も一分間も同じ時ではないのであります。時間の方でも斯樣に刻々に變化を續けてゐるので同じ狀態を繰返さない流轉そのものが時の常態であります。

この極まりなき變化と、滯まるなき流轉こそ我宇宙の本體でありますまいか。

斯う言ふ次第でありますからたとへば林檎に致しましても、これが林檎の本當の形であると言つて標本として示すもの

は一つとして無い譯でありますし、又瞬間とか只今とか申しましても、それ今が本當の今だと示し得る時はないのであります。イとマは既に同時刻に發音が出來ないのであります。イと發音する丈けでも或る長さの時を要するのであります。時間の上にポイントは打てないのであります。丁度幾何學上點や線は論理としては立派に存在しますが、これを形に表す事は不可能であります。一つの點も形にすれば既に點にはあらずして、若干の面積を占め、一本の線も之れを形に示せば幾何の幅員を占めて本當の意味の線でも點でもないものとなるのは時間の上のモーメンと全く同一であります。

斯ふ言ふ風に考へて參りますと、論理とか定義とか言ふものは概念の說明であつて我等の實生活にはかなり緣遠いものゝやうに思はれます。

川柳は吾等の實生活に印するところの詩でありまして決して概念や學理の產物ではないのであります。そして極めて自由に諧ふところの人間詩なのであります已に紋太氏が川柳とは何ぞやとの問題の下に『川柳とは人間である』と結論されました。然り『川柳とは人間である』であります。そこで必然『人間とは何か』と言ふ事を極めなくてはならない事になります。卽ち『人間とは肉體であり自由である』と私は申したいのであります。人間と言ふのは個々を指すのでありまして人類でもなければ大衆でもない。全くの專一の個人、自己、これが此場合の人間と言ふ言葉に該當するのであります。前にも述べましたやうに、凡ては變體が常態なのでありますから、これが人間の標本だ。と示す處の標準人間と言ふものは無いのであります。若しありとすれば神樣か佛樣のやうなものでありませう。しくじりもなければ涙もない。怒りもせねば笑ひもせぬ。私は神樣や佛樣はきらひであります。矢張り人間が好きです人間らしい人間が好きであります。各自變つた人間がそれ〴〵てんでに思ふ儘なる變つた事を行る人間が好きであります。人眞似をするのは自分と言ふものを見失しなつた人でありまして私の今言ふ人間の仲間ではありません。私共は私の感情を私の口から私の聲で諧ひませうではありませんか。他人の聲色なんかは止めませう會ひ難き人の世に生を享けて他の寄生虫の眞似なんかは全く生の冒瀆であります。何がもつたいないと言つても之程勿體ない生の浪費は又とありますまい。私は佛樣はきらひだと申しましたがお釋迦樣は好きであります。お釋迦樣は天上天下唯我獨尊と申されました。獨尊とは誰れ彼れよりも自分が尊いと言ふのではありませずして、卽ち獨尊＝獨り尊い超比較的でありまして、詳ずるに『宇宙間に於て本當に肯定し得る實在は唯我一人である』と言ふ意味なのであります。私の今申上げました人間とは此意味の人間を指すのでありまして『川柳とは人間なり』の人間も此の人間を意味するものであらうと私は信じます（昭和四、四、十夜）

川柳漫畫

# 假の姿（五）

柴路郎評畫

女房のうつ釘みんな仆けるなり

紋太

『アラ妾だつて打てないことないわよ』

と云へば、習はぬ經は讀めざるなり。打てども〳〵直ぐなる釘は無し。口惜しくとも女は女なり。

## 貧乏の子は秀吉をなつかしみ

三日坊

我も貧、彼も貧。彼腕白、我腕白。彼太閤となつて宇内に雄飛す我又希望を後年につなぐ、懐しさも懐し。

## 待ち兼ねたベルはベルだが
## 他所の醫者

光　路

熱は九度三分、愛は限りなし。醫師の十分、患家の一時間にも比すべきか。突如ベルの音聞ゆ。心耳を濟ませば、ひた走りに走り過ぐ、待ち待てば眞に千秋の思ひあるなり。

## 女房の慾が戸棚で腐りかけ

夢遊

女房の慾、貯ふるに妙を得たるも、よく散ずるの方法を知らず。少しく酸味を帶びんか、漸くにしてこれを口にす。大慾は無欲に似たりとかや。これ眞味を知らざる所以。

# 我觀川柳（四）

## 川柳の暗い方面の要素

三好正明

### 前言

僕の一身上に大なる變化が起きた。それは川柳に沒頭することが許されないほど仕事の分量が殖へた（大谷五花村氏などからは笑はれるかも知れないが）それで當初のプランを變更せなければならなくなつた。第一明るい方面の要素を一々説明してゐる餘猶がない僅か二頁位のものを毎月書けない筈がなからうと言はれる方があるだらうがこの二頁のものを書くのに準備だけに僕は少くとも二晩は丸つ切り費して了ふ。それが新古句の調査とそれを拵り抜くだけに費す時間である。それからいよ〳〵書き上げるのには日曜を一日潰さねば書けない。そして書きあげたものは常に自分の意に滿たないが止むを得ないから責ふさぎに掲載させて貰つてゐる　だが考へた。未熟者の僕がこんな苦心をしてまでも下らない努力をして間違つたことを書いてゐると言はれるより潔く要領だけを書いて終りにして了つた方が川柳雜誌の爲めでもあり、又忙しくて困つてゐる僕の爲めでもあると考へるので、今號で完結にすることゝした。

### 暗い方面の要素

明るい方面の川柳の要素は三月號に大體述べた通りである。次に暗い方面の要素を老病死苦のお釋迦さんの分け方及び怒り悲しみの二つと合計六つの要素に分けて左に列記する。

一、老を感じる要素

（イ）肉體の衰へを感じること（ロ）精神の退化を感じること（ハ）若い人と自分を比較して時代に取り殘された淋しさを感じること（ニ）年齢の轉機即ち盆、正月、或は友人知己の死に依つて、自己の年齢意識（平生は忘れてゐる）に目覺めて死の近づけることを感じて老ひを知ること

二、病氣に關する要素

（イ）自己の病氣（ロ）他人の病氣（ハ）近親者及び友人の病氣（ニ）動植物の病氣（ホ）社會の病氣（ヘ）國家の病氣

三、死に關する要素

（イ）自己の死期を覺悟したとき又は直面したときの感じ（

ロ）他人の死に直面し、又は豫期したとき或は死を回顧した時の感じ（ハ）近親者及び友人の右同斷（ニ）自殺者及び不慮の死を遂げた者を見たときの感情（ホ）死を美化し、詩化し或は現實の問題化して考へた時の感想

四、苦痛を感じる要素

（イ）精神的に苦痛を感じることゝ（ロ）物質的に苦痛を感じることゝ（ハ）精神的及び物質的苦痛が餘りに大にして苦痛を苦痛と感じなくなつた時の感じ（ニ）社會が感じる苦痛（ホ）動植物の苦痛を客觀的に見た時の感じ

五、悲しみを感じる要素

（イ）精神的問題で悲しみを覺へることゝ（ロ）物質的問題で悲しみを覺へることゝ（ハ）精神的及物質的兩方面の問題で悲しみを覺へること

六、怒りを覺へる要素

（イ）公の問題で怒りを感じることゝ（ロ）私のことで怒りを覺へること

以上の諸要素は人生のダークサイドから、又はダークサイドを見た時に我々が感じ或は發見する心理狀態、現象である。之を自己の理智で判斷し、感情に訴へ、意思の濾過器を透して、文字を借りて表現されたものが川柳であると思ふ。

## 價値ある川柳

時代は移る『無産』『大衆』『共産』『電送寫眞』『トーキー』なぞゝ云ふ辭書にない言葉が日常語として使用される時代に、德川幕府時代に榮へた江戸情緒が我々には緣遠いものとなつて了ふのは當然である。然し人間の感情生活はさう時代に依つて變化するものではない。夫婦の愛情、親子間の親愛、友人間の友情、君臣間の情誼なぞと云ふものは萬葉詩人の時代否創生記時代、神話時代と近代とでも大した差はないと考へる。只その時代々々の道德、宗教、教育、政治、經濟事情に依つてその表現形式、に差違があるだけで、根本的の感情の動きは喜怒哀樂の四情以外には出ないと思ふ。

詩は理智、意思の世界もその分子として無論閑却出來ない分子であるが、主要分子は感情であると思ふ。故に感情生活に大差なき以上は江戸情緒と雖も我々の琴線を打つものがあるのは當然で、此意味から言つて古句にも存在價値があり生命がある現代句の中にも、價値のゼロなものが生じるのは當り前だと思ふ。よき川柳とは何か、それは人の感情を搖り動かしてよりよき世界を知らしめる詩ではないかと思ふ。未知の世界人の憧れを滿足せしめるものではないかと思ふ、强き個性を涙を以てとかし之に血を加へたものとし全身そのもの、自己の全生命を傾倒して之を筆とし、之を以て未來永劫火にも燒けず、水にも浸かされぬ、光明の紙へ書かれた文字こそ眞の川柳であり、價値ある川柳であると思ふ。拙文要を得ず識者の笑ひを買ふのみと知るが、僕は之を以て當分川柳壇に對する訣別の辭とする。

# 川柳塔

○　住田亂耽

肩のあたりへくづれ來しおさめ

シガレットケースパチンと戀の音

ローマンス簞笥を春の色が逃げ

裸婦のかたはらにギヤマンの金魚鉢

戸樋をかさこそ雀の接吻

事ごとにいさかふ下女を二人おき

勝馬の豫想へコーヒ運ばれる

姫路にて（二句）

風呂場までぼんぼりが要る屋敷町

釣道具士族の家に煤けてる

○　岩本素人

ヴヰタミンAのCのと痩せて行き

松山にて

漱石の食べたうどんを喰べて見る

枕元に手紙並べて寢たりけり

いたわつて呉れて淋しい旅に居る

○　高橋かほる

くぐかれたのは南海のねぎの宿

こつ〳〵と石屋は同じ音をさせ

泊り客化粧のとこへ下りて來る

新妻の包む茶菓子が轉んで出

櫻の宮うるしに負けた人に會ふ

○　水谷鮎美

誰もこず木の芽立つ庭見てゐたり
腕ぐみの膝に百圓紙幣があり
燒けてゐる匂ひ獨酌たちあがり
水藥泡だつ春のさびしさに
つけ豆の一粒づゝに浮き沈み

翠峯氏右手を患ふ

寢臺に何も書けずにさびしすぎ

○　淺井冷々子

世辭のいゝ娘一人で店がたち
東西屋教室の子を振り向かせ
風呂敷の隅の名前を子が見附け

○　伊藤愚陀

養子話がはずむ下宿屋
おめ〳〵と來るを資本家知つてゐる
青空に疲れし若きころの戀
この頃の嬉しさ爪を磨くなり
のろけきけ〳〵はるのさもしび

○　松盛琴人

路郎先生の男子出産を祝ひ

產聲を天地無窮へ呼びかけて
皆さんと牧師ゆる〳〵語る也
憎まれりや損と椅子だけ護つて居
言へば直ぐ待つてた樣に妥協をし
魂を欺まして居ればうまが合ひ
何處へ行く大阪驛の人人人
導火線のやうな男に生れて居
非難される事へ全力盡すなり
外の事を澤山言へとつまり金

○　伊藤綠之助

紅梅にこの頃の戀さけすみて
はゞからぬ父の嘘よ春淺し
諦めてゐても便りは聞きたからう
麥畑辨當空が捨てゝある

松江を去る町二兄（一句）

お別れの日を春の雨渦まざりし

○　酒井駒人

腰掛けて見せて家具屋は一つ賣れ
貧しさは蠟燭さへも早く消し
奉公に行く東京を姉に聞き
殺されて廻り舞臺が又廻り
雲の色草の匂ひもすべて春

○　松丘町二

激情は煙草の灰に似てよはし
卒直な言葉づかひで斷らう
悲しみのごこかにほつとするこゝろ

○　岩崎柳路

義を捨てゝ戀に生てる淺ましさ
じつと見て蚤の力を試しみん
無藝大食ですとよく喰う婆藝者
壹圓札酌婦は別なとこへ入れ

○　北山悟郎

おしきせに俺の天下を談す也
復習もせず八點の賴もしく
卅四決心してもおそく無し
辻占屋女給の袖をくゞりぬけ

○　中島鐵洲

損工事女房がいつか聞いて居る
ブドー酒にコルクの屑の舌に來て
三十を全集本に耽り居る

○　朝田新水

短氣に問へば顎で敎へる
人よしと云はれて見れば痞たゝず
怨まれるこを知らない十八九
煙草輪にふき知らないと澄ましてゐ
をしむまじ命の捨て塲考へる

○　橋本二柳子

人形に喜びもなし春が來る
宿の夫婦足を延ばして話し合ひ
泣く人もなし靈柩車早いこと
一生を考へるとわれ愚かなり
感情に頭を一つ一つ打ち

◇　中澤濁水

船長も喜んで名を命けて呉れ
宵祭り留守へ晩酌放つとかれ
午前二時今度の隣仲居らし
貴婦人へ口說くが如く車夫の添ひ
急用にハガキもペンも借りて書き
寢間で喫ふ烟草に妻は寢返りし
留められて去なさぬやうな雨になり
廢業の女將めかして隣へ來

◇　中見光路

こころが彼奴とトーストを口で受け
すき燒に向ふ丁稚の帶ゆるし
だらーつと風を待つてる五月鯉
大吉と出てケーブルで降りて來る

◇　水田黄彩

よその兒が泣いてゐるんや燗ができ

◇　楊井二南

勿体ない話息子が遊んで居
叱られて來れば錢湯空いてゐる

職を得て（二句）

背廣着て歩く埃も春のもの
新米へ給仕笑顔をして呉れる

◇　奥田雪緒

強情に女は髪を喰ひしばり
小學に通ひ近所へ辭儀もする
戀人よ俺もしてゐる腕時計
安ものの耐久力は剝げかゝり

◇　安西杏三

重役の世辭にも心さがらせる

一徹先生に

春淺くせんじ藥の香にむせぶ

甲霞舟兄

ほつさした氣持で友のお骨上げ

# 粒々集

東京　富士野鞍馬

大廣間二人疊の數をよみ
惚れられて惚れた理想の二人老ひ
法律でいけばこの子が後つぎさ
鐘の鳴るたび思ひ出すも孝
敷島さ朝日をおちよぼ買ひに來る
遠出髭姐さん型を貸してやり
借家法さは家賃拂はぬ事さ知り
團体で歌舞伎へいつて見下げられ

御影　長崎柳秀

洋行へかこつけて云ふ切れ話
見送りさ離れて妻は寒く立ち
大器晩成か歐洲へまた出かけ
法事をばすませて兄は旅に立ち
媾曳にさて格好さ云ふ間取り
玉撞の目にしむ煙草棄てをしみ

呈路郎師

あゆみ出す一歩に親は笑ひこけ

# 古句雜考

蛭子省二

重いこと一枚肩の忠義なり

石川八左衛門に關する巷話を句にしたもの、

石川の忠義にならぶ肩もなし（古句）

の方がわかりよい。

四ッ手駕跡棒肩がはづれさう

早やい筈四ッ手へ一人り先 拂ひ

急がせる四ッ手から身で二人がけ

丙句は四枚肩の事、駕であるから一人即ち一枚肩で擔ぎ得らるゝものでないのを八左衛門は擔いだのだから、並ぶ忠義の肩はないわけ、例の宇都宮騒動で三代將軍家光公が日光御社參に際し、駿河大納言を立てゝ主してゐた上野介本多正純が逆謀の釣天井一件、全く張扇から叩出した事である。茲には興味中心で實錄そつくり一節づゝを拔記しよう。

愈々釣天井の計略がバレてしまつてから、家光公は感じ給ひ、實に本多が此度の結構は容易ならざりしと心を惱まし給ひける、時に御小納戸役石川八左衛門進出て、執權の御計ひ申すべき樣なく感服仕る、併し然程の企てをなせし者故、其手筈相違せし上は暴虎憑河の思案をなし、今夜の中に當宿へ不意の仇を成んも計り難く候へば、御路次の間迚聊か油斷成難し、然ば今夜御同勢を此處に殘置き御止宿の體にもてなし、只今より密に夜通し御歸城成せ給ひて然るべし、と言上し其夜子の刻過る頃石橋宿を立たせ給ふ將軍家は松平越中守を先驅として道を急がせ給ふも、雜人事情を知らざれば心身疲れて一尺共千鳥足、八左衛門怒つて督勵するも捗らず、ヨシ此上は面倒の陸尺共を賴まじと、只一人御乘物の棒を肩に舁ぎ大肌脫にて飛び行く其有樣は天狗樣の所爲に似て最勇ましき怪力なり。未の刻より六里の路を疾馳せて戌の下刻に江戸城大手御門迄着にけり、將軍家還御なり早く御門を開き給へと高聲に呼ばはりしに、御留守居の忠昌卿、夜中は御門

を開くべからずとの仰せに、心急くまま大に怒り御乘物の棒をぬきとり力に任せて小門の扉を打破る。目附衆馳來り狼藉なさば鐵砲以て打留めんと呼ぶ、流石の石川も夜中萬一の事あつてはと再び御乘物を舁ぎ南へ廻り、桔梗御門に入奉り君臣共に安堵の思ひをなす、後世誰云となく此御門を吉凶の御門と申習せりと。

六尺は七面倒と八左衛門(狂)

片棒で忠義につた門 破り

此度の事件にて忠義を盡せし其中に、石川八左衛門は唯一人にて御乘物を擔ぎ小門を打破りし事、一圖に將軍を大切に思ふ忠心の所爲とは云ひ乍ら、天下の法を背くの罪あれば賞罰は共に正し給ひて然るべしと越前守の言上に、流刑に處せられた。配所は則ち御郭外深川永代橋中洲、八左衛門は配所に赴き、無役にて四千石を賜はり子孫永く相續す。今佃島に隣れる地を石川島と云ふは則ち是なり。

駕の忠船で越すべき島へやり

石川や隣の藤も名が高し

なぞは直に解せらる。石川島の事は名所圖會に、鎧島、佃島の北に竝べり。今石川島と號し俗に八右衛門殿島ともいへり…寛政四年石川氏永田町へ屋敷替ありしより、炭置人足寄場等になれり舊名を森島と云ふよし江戸の古圖に見ゐたり…或人云ふ、昔猷廟の御時、異國より鎧一領を奉りけるに重くしてこれを持つ者なかりし時に、石川氏の祖力大なりければ、是を片手に持ちて大樹の御前へ披露なし奉る故に御感賞のあまり此所を宅地にたまふとなり、鎧を携へし賞として給ふ所の地なればとて、鎧島とは號けられけるとなり、とある。隣の藤は佃島の住吉明神社で名所となつてゐる。

小便で佃の藤を見て歸にり

藤を見がてら三神を拜むなり

●三神は和歌三神で、住吉明神、玉津島明神、柿本人丸（因に和歌三神は古來異說があつて、住吉秘記には住吉の表筒男神中筒男神、底筒男神、宣胤記等は住吉、玉津島、天滿宮、類聚名物考等には天滿宮、山部の赤人、柿本人丸、雜說襄話には素盞嗚尊、住吉明神、玉津島明神とな つて居る。古川柳でみると

左右は提燈まんなかはすき通り

眞ン中は浦 波 左 右 年 の 波

眞ン中はわかめ左右は干し大根

花守のやうに左右に御老神

三神は 嬲 とよみし御姿

浦波の左右夜の歌朝の歌

一字づつ餘る左右の御神詠

眞ン中は玉子左右は白髮うぐ

梅干を左右に花のお容顏

ビイドロの左右やくわんこ（等類吟が非常に多い）序に齷齪關係の一句を加へて置こう。

大工からばれた湯殿も乙なはめ

本多正純が百計をめぐらし、百發百中の設計をたて、領分中にて器用なる大工を集め、猶其中十人を選出し、彼の密謀の普請を云付け、此普請成就の上は莫大の恩賞を與ふべしと、其模樣を繪圖にかきて指圖をなすに、先新しく假家の御殿を五間四面にして片傍に湯殿をつけ、其湯殿を一丈四方に造營、陷穽は露顯爲安し

# 川柳住吉御田

藤里好古

て、深く謀慮を運らし天井をつり、其上へ大盤石を乗せ置きて、將軍家御湯浴ある時四方の釣縄を切落し、御側廻りの人々諸共に壓殺す工ハに仕掛けれども、是は尋常に異なりし普請なれば容易には出べなさず其明に臨み少しにても相違なす時は千辛萬苦も水の泡となれば念に念を入るべしとて、職人共は其仕事に掛りし日より城中に逗留せしめ、手傳の人は殊更腹心の者に命じ嚴重に警固をさせて急がしたり、とある。處が其の大工の一人に與五郎なる者があつて、庄屋藤左衛門の獨り娘お早と戀なかになつてゐた。それが父に知れ身分卑しき大工を婿養子にする事は相叶はぬと生ま木をさかれたが、與五郎は御普請整頓の曉は莫大な御褒美が頂けるから、其際田地を求め出世して夫婦にならむと約して城内で仕事にいそしむだ。一夜お早に逢ひたくなつた處から番人に袖の下を遣つて外出し、庄屋の勝手口から下女の手引でお早に會い、かの釣天井作り方の委細なご物語つて、一と先づ立別れた。後に大工共は謀計のもれむ事を恐れて河村靱負の下知で皆切殺され古井戸に棄てらる。惡事千里のたとへ與五郎此世に在らぬをお早は知つて、貞女兩夫にまみゑずと釣天井の事を書殘して自害した父藤左衛門、それをよむで國家の大事　娘の敵、與五郎の怨みを果さむと御着前に件の旨を言上したのであつた。

## 神秘主義と醜猥行爲

ナポレオン一世は言はずや『大なる威嚴は大なる滑稽に通ず』と。余は更に言はん『大なる神秘は大なる醜猥に通ず』と。往昔より伊勢に於ける古市、八坂神社に於ける祇園の如く神聖なるべき禮拜場所の近隣に醜境の存し、且つ又神社寺院の多くの中には長き坂路や石段を以て參道を形成せる事實の存せるは性的情熱と宗教的熱情とが彼是共通せる或物が存するにあらずや、古句に屢出づる僧道鏡の如く幾多の崇敬を一身に帶ぶと言へども其反面には醜聞を流せるならずや、

余が日常見聞する處に於ても肉感的なる人物には熱烈なる信仰を有せる者の多くして理智的人物は概して信仰に冷淡なるが樣である。然して嚴重なるべき神事に遊女の關與する事等は表面よりのみ觀察せば矛盾も甚しき樣であるが『神秘主義と醜猥行爲』との相關に就て考察を進めば容易に諒解出來るのである。近く『川柳巫女考』と題して世に問ふ處あるべし。故に此處に於ては『住吉御田』と『筑摩祭』の兩者を取り來つて此オホトラインに就て語らんとするのが本稿の目的とする處である。

先づ『住吉御田』より筆を進めん。昔時の川柳作家も亦此矛盾に對して異樣の眼を見張りし樣であつた。

住吉はタイコはきらい女郎好き（未詳）

毒な所も守る住吉（武玉川四

田畔で禿のあそぶ神事也（柳樽三十二）

オイランを沼へぶッ込む神事也（柳樽三十三）

鹿島は地もの住吉は女郎好き（柳樽四十四）

泥中の蓮川うゑの神事也（柳樽四十八）

泥水で住吉の田を植てるる（柳樽五十八）

等是を證して居る。

## 現今の住吉御田植神事

は六月十四日（モトは陰曆五月二十八日であつた）に行ふ神田に苗を植る式なる事は敢て言ふ迄もなき事であるが、此處に其式次第の大要を『東成郡神社誌』より抄出せば

本社殿にて式事奏告の後宮司以下神人風流者は乙女植女稚兒等南門より神殿の中門を出で御田の式場に着す。かくて植女は神前に供へたる苗を持ちて八乙女の田舞なごするために設けたる式場の隣なる苗受取所に至り下植女に渡し終りて、稚兒と共に宮司席の隣に設けたる拜觀席に入る。それより式場にて風流武者風流行事あり。こは甲冑を帶し大長刀を携へたるものにして、昔は神宮寺の社僧之を勤めしが今は神人之に當る。次に八乙女の田舞あり八乙女は舞衣を着けず紅ダスキをなし、銀扇の上花菖蒲を載せたるを頭に載き紅の紐にてこれを結ぶ。歌甚だ古雅なり（歌詞ヲ略ス）…… 田舞終て後紅白兩軍の棒打戰ありて式を終ふ。

『攝陽郡誌』十一に依れば

五月廿八日御田植の神事、御供の御田を植る早乙女は泉州堺南傾城町乳守遊女勤之、世俗の所謂神功皇后三韓を征し給ひ御歸陣の時、長門國より植女を見るせ、五穀農業の事を世に廣め給ふ後世末葉愚に成て、乳守遊女となす。因是傾城今に植女と成るの例と云……

とあつて昔時は泉州大津より田樂師來り植女は堺乳守の遊女これを勤むるを例とせしが、今は植女稚兒は大阪新町の藝妓等これを勤め、其扮裝は舊に變らず、紅染の浴衣に萠黃生絹の水干樣の物を着し紙にて作りし綿の花を飾りたる花笠を戴いて居るのである。

住よしの田から去年の櫛かでる（柳樽三十二）

ぐんじゆする田植はお住お吉なり（柳樽三十二）

事足らぬ神樂聞き聞き田を植る（柳樽三十三）

深泥に美女のまみれ神事也
（川傍柳三）

等は是の情景を詠んだものである。如斯植女たる遊女が重要なる參役として活躍して居るのを視て人は何を好んで特種營業婦人を以て、神聖なる神事に關要せしめるかを怪しむであらう。されど古昔に於ては

## 神子と遊女とは二體であつた

のであつて潔齋の嚴格なりし二三の大社を除外せし多くの鄉社では、神事の際は神子にして參役し然らざる常時には宣教使の如き業態を以て諸國を遊行し、求むる者ある時は枕席にも侍したる事はかの熊野勸進比丘尼や伊勢慶光院の歌比丘尼が近世迄横行せし事實が之を證している『太神宮神異記』上卷に豐公が高藏主に云ふ比丘尼の膝を枕として轉寢の夢中に白衣の神人が現出して吾は伊勢太神宮の御使である……以下省略……として神宮の危難を罷がれた事の記載がある。斯の如き文獻は多いが返つて御迷惑となるから省略する。

七八十年以前則ち安政萬延の頃迄は各神社の神樂神子には美人を爭つて採用して社人の多額に登るを計つた結果其風紀は大に亂れた。

神樂のうらへ廻るさむらひ
（武玉川初編）

神樂堂遁げたあしたは母が出る
（柳樽初編）

尻目なぞ遣ひ神樂を奏すなり
（柳樽十一）

と云つた調子に肉感的熱情をあほつて信仰の繁盛を希求した結果

辨天のやうだとはやる神樂堂
（柳樽五十）

千早ふる御捻りもふる美しさ
（柳樽五十一）

と云ふが如くに繁盛した。一方大衆は神子を見て内ぶところが猿田彦
（柳樽四十八）

神樂堂一とかたまりにほれて居る
（柳樽三十四）

神子を見てふとしく立てる宮柱
（柳樽一千三）

と云ふやうに信仰の裏面には肉感的な情熱の流れが在つたのである。

千早ふる神もたぼをば好き給ひ
（柳樽四十四）

神事と遊女との關係に就て次號に於て詳說するとして今回は多忙であつた爲め不得要領ではあるが此邊で御免蒙ることとする。

## 柳秀氏より（主幹宛）

此の間は悪々御見送り被下感謝仕り候大連より遙に敬意を表し申候

四月八日　長崎　柳秀

○

本日午後五時四十分過露支國境マンチユリヤ驛着、稅關檢査をうけ十時十分過モスコーへ向ひ申候氣溫低く興安附近吹雪積雪二寸餘、午後天氣晴朗漸く溫かく相成り申候。十二日

マンチユリヤにて　長崎仙太郎

# 一路集

【募集句】

## 雨蛙

梠元紋太選

椽に出る心は暗し雨蛙　南窓
雨蛙うがい藥をあびせられ　沒食子
禁札で今日も無事なる雨蛙　ゆうらん
雨蛙三年生に捕へられ　天絲
動悸うつ可愛ものに雨蛙　湖山
雨蛙鳴くな干草入れるまで　青水
雨蛙に守られ夢に入る　たけし
雨蛙何に怖じたか枝の裏　突支坊
雨蛙餘つ程逃げた心算なり　雨月
雨蛙宿つた客へ鳴いて見せ　里魚
雨蛙搖れるがまゝに眼をつむり　柳月坊
さう道へ出ては困るよ雨蛙　士紘堂
雨蛙見ゐんつもりですましてる　皎月
雨蛙暴風雨をこほけた顏でゐる　大鷺
雨蛙好いた同士の又泊り　賣茶亭
雨蛙載せたやつでは居たまらず　鯉友

雨蛙ものの哀れは葉から落ち　柳川亭
雨蛙きゝつゝ遠く逢ひに行き　京郎
雨蛙蚊の自由さを瞰めてる　太路
雨蛙チト矛盾した日が當り　竹堂
風呂上り雨蛙をじつと見て涼み　高峰
腕白へちゝ斜に飛ぶ雨蛙　折草
葉の色へ逃げ雨蛙見あたらず　繁喜代
踏みつぶす氣にはなれない雨蛙　源太夫
雨蛙降れ〳〵〳〵と鳴いている　小六
井戸端にかしこまつてる雨蛙　雪峰
庭下駄へ一つ飛んでる雨蛙　穂波子
雨蛙明日を急ぐ宿で聞き　陽氣亭
朝の氣へ目を見開いた雨蛙　喜由
雨蛙つかれたやうに葉に坐り　吐句坊
雨蛙鳴けば姑の氣むづかし　木偶人
雨蛙輕るい重みで搖れてゐる　悟空


天花粉りゆうひの
やうな顏になり
かほる

御打粉
匂ひ入
松風（まつかぜ）
本舗　伊藤大一堂
發賣　高橋盛大堂
到の所の藥店化粧商店
にて販賣す

雨蛙 泣いて茅屋赤い飯 同
墓になる氣か雨蛙きばつてる 市公
雨蛙雨ふらばふれ風もふけ 同
雨蛙母鹿箱へ濡れに出る 白鷗
雨蛙獨りで居ればやかましく 同
向き〳〵に雨蛙みな鳴いてゐる 時雨郎
芋の葉に昨日から居る雨蛙 同
雨蛙鳴けば戀しさ增してくる 新水

## 宿引

宿引の一人が喉を枯らしてゐ 新水
卷煙草耳に宿引客を引き 桂枝
宿引は細い横道連れて行き 虛白
自殺する事も知らずに宿に入れ 喜由
盜人と知らず宿引連れて來る 暑岐
宿引は只でも留める樣に云ひ 菊路
宿引は去年の顏をおぼへてゐ 柳村
宿引へちと忙がしひ雨になり 折草
驛からのなだれへ宿引よくしやべり 高峰
旗卷いたまま宿引はあふれて來 突支坊
宿引の顏をハッキリ見たも朝 鐵洲
宿引は突如荷物を渡される 鎌月
宿引は夫婦の樣にしてしまい 琴人
團体が來て宿引をまごつかせ 樂山人
宿引はお氣に召す事ばかり云ひ 冷々子
宿引の中の一人は新蝶々 呑陽

掌へちよんとのつてる雨蛙 同
五月雨の中の中なる雨蛙 今雨
雨蛙そのまゝ西に陽は沈む 同

佳

雨蛙だん〳〵近う牛を聞き 竹堂
青蛙ピョント冷たく手にとまり 士紘堂
雨蛙ぎぶん〳〵と人を知り 文芳
腕白の手に雨蛙目をつむり 清路

## 高橋かほる選

宿引に氣も恥かしい夫婦旅 ひさし
今着いた汽車宿引の列になり 萬樂
宿引について曲つた廣い道 駒人
打水をして宿引のひまな晝 狂雨
宿引の夕陽浴びたり春負たり 松風
宿引の今日はおじぎをするばかり たけし
宿引の聲に灯の入る奈良の街 光路
(佳)宿引へ遊ばさせた花が咲き 同
心得た顏で宿引連れて行き 文芳
ストーブに宿引次の汽車を待ち さだを
宿引のそれから風呂を焚いてゐる 湖山
留まる氣になつた宿引禮を云ひ 楠堂
宿引はとにかく一度おじぎをし 鬼逸樓
宿引は顏を見乍らおじぎをし 潮多郎
知らぬ土地宿引だけが物を云ひ 白鶴
宿引が執拗く客に引かれ行き 空山

酔ふてゐる樣に宿引抱へ込み　多聞
宿引の夜は仲居ですまして來　つばさ
宿引の聲景氣よく内は受け　山茶花
逃がしても宿引次をつかまへる　市公

## 心中

◇　三笑選

心中の明日に迫つた母の顔　山茶花
世の中に未練ない樣に心中する　香仙
心中を見た目に戀の淺ましく　黒天子
心中の位牌へ老の指を繰り　青路
心中のもう見をさめと芝居へ來　折草
別々の岸へ心中浮き上り　時雨郎
心中の話になれば横を向き　閨堂
抱き合ふて心うつゝに海を見る　穂波子
心中の女へすまぬ息を吐き　陽喜亭
心中とまでの仲とは知らざりし　繁喜代
心中のもうこれきりの橋を越し　正春
心中の片割れ伯父にひきとられ　省三
心中の腕に時計の午前四時　今雨
失業の果は夫婦も心中なり　靜香
心中は暗から暗を逢ふて行き　木偶人
堤防へ心中長い影を引き　沒食子
交番の留守を心中見て通り　ゆうらん
(人)宿引の引くだ引いて寄席へ行き　六造
(地)汽車の來る時分宿引顔揃へ　今雨
(天)宿引はゼンマイ掛けた如りくた　天絲
(軸)宿引の板塲もするか指サック　かほる

西本三笑
北山悟郎　共選

心中して見たい氣になる獨身者　天絲
心中と決めて女の氣の强さ　鬼逸樓
心中の幸か〻幸か助けられ　楠堂
心中の先立つ罪を書き終り　光路
無理心中廓の宵を寒がらせ　文芳
心中した家へ見舞の口ごもり　文斐
心中へ嘲るやうな陽が當り　皎月
心中の泊つた宿も調べられ　一男
心中を女の親は怒つてる　虛白
心中もならず宿屋で押へられ　吉朗
心中の一日何か宿で書き　玉絃堂
心中の跡を無口でふり返り　柳月坊
心中へ夜明けに近い鐘が鳴り　蝸牛
心中の塲所を探して寒うなり　里魚
心中と定めて二人は書き初め　突支坊
今度陽が出ると二人は死んでゐる　たけし
書置きもせず心中は世を呪ひ　樂山人
許されぬ二人は死んで楯をつき　高峰


喫茶と洋食
スウハィテンリキ
角のでまる出へ學大科商丁二東らか送放央中
(天王寺區烏ヶ辻町)
春の夜は詩人でなくてもなんとなくけだるさを感じるものです。
まして詩人には堪られない哀愁ともなるものです。
香り高き酒と美しい日本娘があなたをお待ちしてゐます。
是非お遊びに。
……
(川柳家楓林君の經營)

眞剣に惚れて死ぬにも氣が揃ひ　同
心中の相手を信じきつてゐる　綠雨
心中をせまつた女　凄うなり　同
心中は知らない道を歩くだけ　新水
心中のその日女は濃く塗り　花情
心中の話に出戻り編み續け　同
心中でもすると女は大分醉ひ　京郎
心中をするのへ夜なぎ世辭を言ひ　同
心中いあつた夕刊借りにくる　たし路
心中は廓に流す唄になり　同
心中の家を噂で通り過ぎ　双光
氷人は心中の話出して見る　齊
駈落のやがて心中ではなれり　雪緒
心中の出來そうもなし四十過ぎ　普天
浮世もう捨てゝ心中するときめ　狂雨
心中に惜しいお金か殘つてゐ　ひさし
心中を思ひ止ごまる鐘を聞き　雪峰
心中した二人すげない親を持ち　竹堂
心中へ泣いてやりたい我なるに　太路
心中の晴着に涙あらたなり　朋果
心中の場所も名所の内に入り　賣茶亭

選

○　悟郎

心中と迄はゆかない程進み　桂枝
心中の手紙は不幸後に書き　石涯子
心中の噂に濱の朝があけ　陽氣亭
心中の知らない道を歩くだけ　新水
心中に女の方は惜がられ　ひさし
心中に惜しいお金が殘つてゐ　同
角帶の方が蘇生の見込あり　小六
親が來て泣く心中の無分別　時雨郎
同情も無く心中の笑はれる　吉朗
心中の勝利者と言ふ顏で死に　三輪
一方を探させてゐる青い淵　冷々子
心中の文もつともらしく書き　同
心中の添ひとげたやうに死んでゐる　玄絃堂
心中のあとは浮世の唄となり　柳月坊
心中の夜明けに近い鐘が鳴り　蝸牛
乾盃の如く心中毒を飲み　同
心中をするにも場所の好し惡し　暑岐
心中を見送るように虫の聲　里魚
病院で女の事を聞きたがり　草石
心中へ教職の二字消ゑ去らず　波紋
幸福を感じて二人死につゝ行き　愛子
何もかも心中きれいにかたをつけ　白柳
パラソルとステッキ丈けの舟がつま　同
心中の身分が解けて呆氣なく　青路
心中を見た目に戀の淺間しさ　黑天子
心中は悲喜こもごもの唄にされ　卯三



## ◇新誌友

本誌普及のために愛讀者各位の御盡力によつて益々讀者が增加してまいります。本春から御紹介者と新誌友の御芳名を本誌に揭げてその御好意を感謝してゐる次第です。何卒此際意義ある川柳雜誌倍加運動を起し讀者一人が一名の新購讀者を御勸誘下されるならば本誌はより良き川柳雜誌となりますから川柳家に限らず社會一般讀者の御紹介を願ひます。見本として川柳雜誌をお送りしますから御申込下さい。

「川柳雜誌」半年分前金金壹圓八拾錢以上拂込みの讀者と誌友としてこゝに芳名を錄します。(四年四月十四日まで)

住谷南窓、沂藤テルホ(岩本素人)辰馬六郎、田邊角次郎(松盛琴人)白井一、今村荒男(長崎柳秀)岩崎義彦、鳥居長太郎(若井たけし)伊藤薰、丸山公二(松本助六)前田松太郎、住田亂耽)大尾幸隆(森田輝翠)今川喜一郎(中見光路)大林實三郎(安井ひろし)八田盜鐘、定石金左衛門、名島素有子、杉原木三、廣島三郎、安藤空山永田儀三郎、松並光哉、下村齋治郎、關本雅祐、藤井義一、阿部兵太郎、若林敏西村市公(本社事務所)(括弧内は紹介者)

須磨明石今なほ心中有るそうな　籬　楓
心中を女の　親は　怒つて　居　虚　白
心中ですと　仲居餘り　驚かず　省　三
心中の身分知りたい人が　立ち　秋刀魚
心中は此の世を恨んだ氣味あり　正　壽
心中の相手を恨む氣にもなり　繁喜代
心中を知らず子供は好く　眠り　つばさ
心中は戀の外にも　曰くあり　善　治
心中する程あの女好くも　無し　秀　聲
心中を讃美す借金　と　病身　と　楠　堂
心中にもう　一　日を　過す金　源太夫
其の上に同じ墓をと願ふてる　鐵　洲
救はれて心中やはり禮を　云ひ　天　絲
心中の崖まで夫は追つて　行き　坊
交番の留守を心中　見て　通り　同
街の灯に久　里　心　出る　心中　沒食子
心中があつてさすがの親も折れ　菊　路
心中をする氣で親にさからわず　ワン公
心中をする娘と知らず着せてやり　花　情
心中をするのに新の足袋をはき　竹　堂
心中をするのへ夜泣き世辭をいひ　京　郎
心中はみんな優しきものにされ　鯉　友

心中のあつた夕刊　借　に　來　る　たし路
心中無駄に化粧のあとを見せ　大・子　皎　月
子の安否心中記事も見逃さず　萬　樂
心中の場所はお金の切れたとこ　同
心中の話で女中　飯をつぎ　同
心中に世の同情が集められ　籬　風
心中の明日に迫つて母の顔　山茶花
心中の隣は記者へ好く喋り　双　花
心中の下駄は貞女らしく脱ぎ　ひとし
心中にその界隈は早く暮れ　書　緒
心中を文學好きにしてしまひ　曹　天
一所へ埋めて欲しい走り書　松　風
心中した夫の靈へ手を合せ　好　綠
心中のあつた海岸岩ばかり　花　情
心中がヘットライトに怖氣づき　突支坊
心中の聲川端へ灯のならび　專　路
水底に二人の愛は生てゐる　たけし
書置もせず心中は世を呪ひ　倉之助
心中の下駄は昨夜に買つたもの　悟　空
心中の最後の筆は宿へ詫び　文　芳
無理心中廓の宵を寒がらせ　同
心中の一度は水を覗いて見　光　路


## 合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさわしい簡素な裝幀に出來ました。

第一卷及第二卷　各金五圓也
第三卷及第四卷　各金參圓也
第五卷昭和參年分　金參圓也

尚古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで　各一部　金拾錢
第四十八號より第五十九號まで　各一部　金貳拾錢
（但し一號九號廿一號廿五號卅六號卅七號はありません）

大阪市住吉區杭全町六〇三
川柳雜誌社事務所


## 居

▲川上三太郎氏は東京府下南品川町五ノ六六へ▲村田周魚氏は東京府高田町雜司ヶ谷五〇六へ▲佐々木三福氏は大連市初音町二九九へ▲岩本素人氏は松山市柳井町七〇へ▲松丘町二氏は大阪市東成區別所町五〇二都筑方へ▲久世一路氏は大阪市港區千島町四七へ▲須山重陽子氏は神戸市東須磨町仲町二三へ▲土井文蝶氏は大阪市西成區玉出通二ノ三七へ▲岩崎内匠守氏は大阪市港區二條通四ノ四一へ各轉居

# 「雨蛙」選句覺書

椙元紋太

▲雨蛙明日を急ぐ宿で聞き、あしたを急ぐ、は句作に馴れた手練者ならんと作者の名を見ると陽喜亭、矢つ張りね、この馴れた臭味を振いて欲しい。

▲芋の葉に昨日から居る雨蛙。葉の上に死んでるやうな雨蛙。同じ様な句だが前者は芋の葉と具體的に示してゐるだけに明瞭である。上にさいふ必要はない。昨日から居る。これは事實はそんな事はないかも知れぬが、昨日も一疋乘つてゐた今日も居る。そこで作者がさう感じた。これは受取れる。死んでる様なは印象悪くて損、作句上考へねばならぬところ。

▲時雨郎氏の句稿の字は美しく眼に映つた。

▲キャンピング明日氣づかうに雨蛙。墓參り子供見つける雨蛙。花鋏切りたい花へ雨蛙。その他無數の上五文字に名詞を置き、下五文字に同じく名詞を置く、この手法の句が多かつたが、これは句が纏まらない駄目な遣り方でブツ〳〵と句が千切れてゐる。

▲雨蛙蛇の視線を知らぬやう。巧みにこなされてはあるが、やがて起る悲劇慘らしさを連想すると不快を感じる。この他にも洋杖で押つぶすとか、子供が何とかするとか、直接に慘しさを見せることは失敗。慘らしさを材料にしても、そこに美感の衣をふけて置きたい。雨蛙生きたまんまで呑みほされ、これではぞつとする。

▲内容と叙法の味ひが合致せぬとぴつたり來ない、雨蛙冬を地下に避寒して。これは内容は當然の事であるのに句らしく纏まつてゐる。内容が敗てゐるのだ。手を突いて天をおゝいで泣いてゐる。これも叙法が勝つてゐる。おゝいではあをいで。雨蛙井戸にぽつかり浮いてゐる。これは叙法が敗けてゐる。叙法即ち感激。

と考へると勝つてるの敗けてるのはちと可笑しい言ひ方だな。兎に角叙法も内容も動かぬ只一つのものでなくてはならないと思ふ。

▲生れると一人法師の雨蛙。一寸見方が皮肉だと思つたが何だかそぐわぬ氣持を感じて一人ぼつちが利かないところがある。ところが次の句同じ作家の、雨蛙おばこの裏で友と會ひ。これでは前の一人法師が利かない筈だ。作家の氣持がしつかりと極つてゐない。一人ぼつちと見たり、友達があつて見たり、何も足をとる氣ではないが、考へさせられる。

▲感じたことを其の儘率直に云へばよいと初めの人によくいふことであるが句作の素養に乏しい者にはこれは當らぬ。寧ろ技巧に老練な人に云ふ言葉だらう。

▲二三句の人の全沒は堪え易いが、制限通り十句の人の全沒は堪え難い。肚の中で作者に託ながら線をひく。抜いた句は作者に代つてでも世間に對して選者が全責任を持つ覺悟が要る。落ちた句にも作者に對して説明が出來るだけの責任を持たねばならぬ。これだけ澤山の句に全沒が多くてまだ僅かしか抜けてゐない。それは若しかすると自分の持つ趣味の範圍内ばかり漁つてゐることになるのではないかと恐ろしくなる。

▲雨蛙暴風雨をとぼけた顔でゐる。この錯誤から來る可笑しみはこれも一つの型で、しつこいのは五月蠅いが、これ位なら抜かぬ譯にもゆかぬ。

▲雪山皎月氏はよく雨蛙を見てゐられると思つた。もう縮かんで飛び出さず。水氣が取れて粘り付きなゞ併し餘りに單純なのが面白味を殺いでゐる。

▲雨蛙が鳴くと雨が降る。雨蛙の喧しい泣聲。いくら巧に言つてあつてもこれ以上に出ない句は共鳴し兼ねる。例へば新聞の豫報裏切る雨蛙。郊外へ來ても寢られぬ雨蛙、雨蛙一歩も引かぬ聲で鳴き。雨蛙鳴けば母親降ると極め、雨蛙鳴くと晝寢へ俄雨、等々々々々、この他無數。

▲尾野柳　ゆずらん、の諸氏は一枚の用紙に二三題を同記してゐられたから皆雨蛙の句稿中へ混つてゐる。係の人は注意して切り離して整理されてはゐるが、時々斯うして見落される。私の見付け方も遲かつたから何うすることも出來ぬ。矢張り應募者が規定を守られるのに限る。

▲私は又卑怯にも軸吟が出來なかつた。雨蛙この家の庭を廣う住みといふのが一句出來たがもつと澤山作つてそのうち出ら撰出しようと思つてゐるうちに遂にか來なかつた。

# 山椒氏の事ども

麻生路郎

三月十八日午後二時五十分に、本社客員山椒武夫氏が幽明境を異にされた。

古句研究家としての氏は『誹風柳樽通釋』の著を以て普く知られてゐた。氏はその序文に、素人の素人解である云々と非常に謙遜された言葉を述べてゐられたが『誹風柳樽』の逐句評釋は氏によつて先鞭をつけられたもので、しかも大過なく第三編までを刊行されたことは全く偉旅立たれた精力の絶大さを思はされたのであつた。次いで十四年十月七日に二篇昭和二年五月二十日に第三篇を刊行された。氏の研究がますゝ白熱して來たことは、第三篇に至つて岡田三面子、今井卯木、西原柳雨、山中共古、安藤幻怪坊氏等の補説を評釋に附して、その完璧を期せられたのを見ても明かである。昨年二月今井卯木氏逝き、次いで、安藤幻怪坊氏逝き、今又武笠山椒氏の訃を聞くことは、柳界の一大恨事と云はねばならない。殊に近くその第四篇の刊行が期待されてゐたゞけに甚だ遺憾の極みである。

山椒氏の研究はひとり川柳にとゞまらず、徳川文學、和歌、俳句俳文、年中行事、狂歌詩等にまで及んでゐた。その著書の如きも誹風柳樽通釋三冊の外、國民の歌、有朋堂文庫編修（源氏狹衣等）、うづら衣等がある。

氏は本誌のため、特に好意を寄せられ客員として『本事川柳』その他を執筆し時に句を寄せらるゝなど、我等の常に感謝して措かないところであつたが、その勞に酬ゆるの尠い今日氏を失ふことは痛惜するに辭がない。

氏は明治四年一月六日埼玉縣北足立郡三室村三室三一三六番地に生れ、七才の時三室村小學校に、十四才の時共立學校に入り、明治廿九年三月廿六日東京帝大文科大學文學科撰科を卒業されてゐる。明治二十八年四月東京府尋常師範教諭を

振り出しに、卅年九月眞宗京都中學教諭卅一年八月第六高等學校囑托、卅三年十二月埼玉縣第一中學校教諭、卅六年第七高等學校造士館教授、四十一年十月には文部編修、四十三年三月には同圖書審査官、大正六年十二月には文部省視學官兼圖書審査官となり、同二年六月に文部省圖書官、同八年九月文部省圖書事務官兼文部省圖書官同九年四月に文部省監修官となり同年五月に教科書調査會幹事を内閣から命ぜられ、同十一年高等官三等、同十三年十二月に正五位に叙せられてゐられる。

以上は氏の略歴で令嗣幸三氏から聞かしていただいたものを縮め綴つたもの、位階は最後のものをもつてした。

聞くところによれば、誹風柳樽通釋の第四篇の草稿がその机上に發見されたので、山椒氏が高校教授時代最も親しくされてゐた當時の生徒の一人が是非とも出版したいとて出版に努力されてゐるさうである。又大學時代からの親友藤井乙男氏に同書の卷頭へ小傳を書いて頂くやうに依頼されてあるさうである。何れにしても故人の勞が酬ゐられ近く上梓されることになれば文献の少い柳界にとつて稗益することが大きからうと思ふ。

（カットの寫眞は大正十四年十月二十八日自宅に於て撮影せる山椒氏、記事中の寫眞は十六年前の山椒氏、令嗣幸三君ひろ未亡人）

## 悼

▼探偵小説家として知られてゐる本社賛助員醫學博士小酒井光次（不木）氏が急性肺炎で四月一日午後二時半永眠せられた。享年四十。氏は愛知一中、三高、東大醫學部を了へ、生理學教室に衛生學を專攻したが大正六年東北大學助教授としてロンドンに外遊中、學生時代からの肺患で一時重體に陷り、ブライトン海岸で病を養ひ小康後渡佛、大正九年歸朝したが遂に教壇に立つあたはず、夫人の郷里に隠棲し、大正十二年名古屋市御器所町丸屋に居を構へられ、病閑探偵小説に筆をとつてゐられたのです。

▼本社賛助員大道弘雄氏の嚴父大道久之氏が四月十七日午前三時胃癌で亡くなられた。享年六十七。天滿宮に五十年も奉仕され大阪神職界の元老として敬慕されてゐた方である。お孫さんを抱いて天滿宮の社内をぶら〳〵歩いてゐられた姿が今もなほ私の目に殘つてゐる。

▼北海道の高木夢二郎氏が三男寛君を亡くされた。子ぼんのうの私は慰むるに言葉がない。「碧空の底に涙のさん〳〵と」といふ句を寄せられた。段々日が經つにしたがつて悲しみが大きくなることゝ思ふ。（路郎生）

# 或る日の感想

前田五健

時事紙上に日々轉開する前田四段對吳三段の日支碁戰……本因坊の評は伯父さんの如く「あすこは、あゝ押すよりこう切つた方がいゝ」對局の兩人は「こゝをこうしたかつたがごうも判らんので自重した」「大局の算盤を置いて棄てゝ見たが反つてよかつた」等々々後悔を先に立てたり後に立てたり意外の運不運に片付ける感想やら、反つて窮地に陷ちて活路を見出すやら やらやらが恰も人間行路の縮圖の樣に思はれる。

其れだけ見物衆の力も分相應に「僕ならこう行く所をあゝやつたのは矢張り支那人あなどれずじや」「僕の思ふ通り打つたわい」なぞ、等々煙草の煙と共に勝手の熱をもやつかす。

「川柳の推敲と同んなじじや自分でいゝと思つても講評を聞くと成程と感ぜられる」「さうさう捻ねり殺す、詰り考へて調をこわす樣なもんじや」「いや道樂も算盤を速く彈いた方が勝や」「小鳥でも思ひ切り一つで損する樣なもんで現に僕なぞは……」相變らず放題を打ち飛ばす折先程からニヤ笑〳〵つてた一人「一目二目で大切な時間を過したり頭を費ふのは阿呆らしいジャン桒できめたらエーのに」一同哄笑：沈默　考へさせられる……川柳味の幕をスウとおろす。

城山がぼうと霞んで右手の長堤が淡黄淡青に見へる。麥が三四寸程の郊外「エーか敵は一小隊だ彈を込める体にて、よく覘ふ、地物の利用を忘れなオイオイ貴樣は伏せ伏せオイ貴樣は折敷きだヨイカソレ突貫……」「ワアーッ」「麥を踏むな溝を走れ」やがて兩軍が對した「よーシ攻擊軍が、なつておらんやり直し元へッ」中尉殿が手を振る「氣合がごうしてもかゝらんねや」「矢ッ張りポン〳〵と音がせぬと張り合ひが出ぬ」「囃し方見

---

# 川柳類題索引 (4)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし　越村如香　安井欣女　共編

題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其號の何頁を表はす。

## (二) 職業、職名 (2)

### K


小料理屋　一17
給仕　二23
騎馬巡査　五13
氷屋　六13
記者　八13
髪結　八16
牡蠣船　一二32
校長　一五19
鍛冶屋　二五11
喫茶店　三六62
雲助　四二49
紙屑屋　四五55
小鳥市　四八68
藥屋　四八69
看護婦　五四54
高利貸　二17
四七50
四三53
三七33
三六62
四九57
カチワリ屋　三一41
カフエー　四〇32
妓生　四二49
小間物屋　四六52
口入屋　四八69
五六30

たようなもんや」「大体今日はチト時候がよすぎるわい」低聲にブツ〳〵云ひ乍ら元の位置へ元の姿整で麥を踏まぬ樣に型がきまる　其の間將校殿は雲雀を見上げお百姓は鍬の手を休め十供達は劍劇遊びをやめて漫畫中の人となる。お日樣がにについて居るのは勿論、窓から首を出したのは私…松山郊外の或る川柳めいた日である。

# いちねんぼ

桑原京郎

チト大きい目の小倉袴に縫上げをし乍ら母さんは、もう一度念を押された。

「桑原テイイチと呼ばはつたら、ハイと確かり返事せなあかんぞ」

「ウン：云ゐるたらッ」それよりも、其のダブ〴〵の袴を着けて、少しも早う行きたかつつた。

それは、私の小學入學の朝である。

……

父に伴はれて、號鈴を合圖に指定された教場に着席した。各々父兄に附添はれて、其の年の凸凹連は神妙に控へてゐる

やがて、先生と役人らしいのが入つて來た。

「これから、皆さんの名前を呼びますから、來てゐる人は判然返事して下さい」と名簿を操り乍ら注意された。

「さあ愈々だ」私は胸を躍らせて「：テイイチ、ハイ・テイイチ、ハイ」を念誦するやうに操り返した。

「今江××、池田××、原田××」

二十名程呼び上げられて

「桑原サダカズ」と來た。私は知らん顔してた。誰も返事がない「サダカズ」と一段聲が高い。と後方から正しく父の聲で

「參つて居ります」に續いて「テイイチ」と申しますので」と附加へられた。

「しもたッ」と思たがもう遲い。張り詰めてた氣が一時に拔けて、口惜しかつたが、しかし一つの不思議さを發見した。

歸る途すがら、不足らしく父に尋ねると貞一はサダカズとも讀むことを聽かせて呉れたので、曾て知らなかつたことがまた一つ覺ゑられた嬉しさに喜んだ。返事出來なんだのは殘念だつたが。

今丁度、二ヵ昔前の心境で、川柳に敎へ導かれつゝある幸福を、感謝せずにゐられない。この心境は、おそらく湯棺されるまで持ち續けるであらう。人生五十年：三年を以て、漸く一年を終了するであらう私は……（一九二九、三、五）

---


工夫 五七 54
M
餅搗 二五 23
N
仲居 五 8
軒店 二九 21
内職 四二 46
O
女將 七 13
女車掌 五三 47
R
漁師 四三 36
S
船員 四 13
社長 一九 8
村長 二六 25
車掌 二八 9
職人 三〇 30
侍 三四 37
支配人 三八 31
師匠 四一 45
署長 四七 46
酒屋 四八 69
先生 五一 56
師團長 五二 50
總理大臣 五三 52
魚屋 一〇 13
四五 51
三七 37
五三 50
商人 三三 30
五五 54
四七 41
寫眞屋 四八 68
五四 52
專門家 五三 48
支店長 五三 53
マーケット 四〇 34
五三 54
57
踊子 四一 42

# 眞川柳に就いて

松盛琴人

本誌二月號に於て椙元紋太氏が、川柳とは何ぞやと云へる題下に述べられた如く、實に川柳は自己生命の創作である。即ち川柳とは官能的存在樣式に即して表現されたる、作者自身の生命其物である故に川柳とは自己であると論結されてゐる。

隨て川柳は魂の躍動せる生命あるものでなくてはならぬ。而も其如き眞川柳を生まんとするには吾人の生活を時代の潮流と共に合流せしめ其處にす際の遊離も許さぬ程緊張して居らねば完成せぬ。

之に反して川柳が若し、自己の生活と沒交渉なる時は、その何等の價値も有せざる非藝術品で終る。

今川柳創作過程を顧みれば、其藝術的創作品は感激的衝動によつて生れ、且ツそれが本質的卽必然的なる時に限り、川柳は常に眞實性を具有するものである事を知る。故に作者が何等かの衝動によつて、眞に自己を表現する川柳を創作せんとするに當りては其生命を乘りすべき資料を綿密に撑撰する必要に迫られる。それは直ちに藝術の成否を決定するものであるからである。左れば各人は其個性により自己に最も適切なる、官能樣式を與へ得べき資料を探し求める。其資料が本質的なればなるほど各人の個性の反影たるべき特殊性を發揮する。

左うした獨自の生命ある資料を求め得たならば之によつて自己の川柳は生まれる。是ぞ少なくも眞實なる川柳である。然も決して其特殊性は他の追從を許さぬ程の藝術品を生まんとするにはそれだけ唯一不二なる資料に依らざれば眞に自己の川柳は完成されぬ。其意味に於て川柳の創作は遊戯であつてはならぬ若し夫れが遊戯であれば川柳に進歩は望まれぬ。

吾人は眞實に生き出でんとする絕對精進に相當する眞劍なる態度を以て自己の川柳を作る否生み出す可きである。其處に初めて眞川柳は完成されるであらふ。故に川柳は其内部に作者の魂の躍動する生命が無ければならぬ。寔に川柳は自己である。

# 三月の近作柳樽から

出口善治

何處をどう來たか四十の春に逢ひ　晃卓

四十に近く迷信をしりぞけず　蒼梧樓

人間も四十の聲がかゝると急に老けたやうな氣になり、あまりにもあわたゞし




集金人　五七45
T
タイピスト　四五35
豆腐屋　二17
探偵　四七50
U
うどんや　一九32
植木屋　五二54
Y
家主　四16　三三32
役者　一〇13　四四54
洋食屋　二四14　二三22
藥劑師　四七42　宿屋　四一47
夜勤　四一47
夜店　五六45 49　夜業　四八70
藥局　五八29

（三）家庭及家族

A
姉　三12
朝寢　一一16　二五22　四六52
朝風呂　一七24　四四54　五三54
安產　二四31　四五55
兄　二六28　五二48
赤ん坊　五〇53
B
別莊　一一53　五三54
晩酌　五八48

車夫　五八45
捕手　五四55
床屋　四四54
運轉手　三八35

かつた過ぐる半生を振りかへつてみると言ひ知れぬ物淋しさを覺えるものらしい孔子は四十を不惑と云つておられるが、これは孔子にして始めて云へる言葉かも知れぬ。

もうけ口　資本のことで一頓挫　晃卓

「猫の恐怖から逃がれるには猫の首に鈴をつけておけばよいではないかと或るネズミが注進すると一同成程と感心したが折から他の一匹が、それではその鈴を誰がつけに行くのかと突込んだので結局その名案はお流れになつた」

これは一つの寓話にすぎないが、晃卓氏が指摘してゐられる如く、吾人は終局まで考へてをくだけの用意の周到さが欲しい。

九人まで一萬圓でよいと云ふ　觀月

「五萬圓十萬圓と言ひ易き」（天絲）も何と慾のない可愛い望みではないか。しかもこの一萬圓が容易に持てないのだから尚更いとしい。

あまりにも聞わけなさを抱締める　テルホ

母性愛が躍如としてゐる。

華やかな裏面を　父は　說ききかせ　山茶花

この句を讀んで思ひ出すのは番傘の一月號に出てゐた伴内氏の「親切の裏を娘に說ききかせ」の句である。しかし前者の方によりよく「子」の性格が描かれてゐるやうな氣がする。そして時代相があざやかに出てゐる。尚テルホ氏の句で「酒飲みと知らずに添ふたわけでなし」と二月の近作柳樽の「知りもせず酒もやめさすつもりらし」とは同想だが後の方が少しいゝやうな氣がする。

パンを見りや尾を振る犬と思ひに　湖山

プロレタリヤに對するこれは又何と云ふ侮辱の仕方だ！我々はやはり團結してブルジョアに對抗せねばならない「權力へ理窟を仕方なく捨てる」（皎月）時代はもう過去のものではないか

情實が露骨になつて　課長首　吟水

痛快な句だ溜飲が下るやうな氣がする

停電へ茶　腕を　持つたまゝでゐる　專朗

情景が彷彿としてくる。けだし体驗が生んだ句である。

鍬振ればこゝにも春を待つ蛙　菩香壇

石竹さんの「蛙ふくれるな：」の句に盡きせぬ愛情があるのに對して、これは又希望に輝やく作者の平淡な心境が波なき大洋のやうに描かれてゐる。

誰が妻ぞ子供のやうな　母であり　平八

いはゆる現代の「ママ」を寫して得て妙

立志傳そんな時代　とちがふなり　二竹

手切金　投げつけたいがこの暮し　たけし

浦島を十年振の我に見る　光哉

敏捷にすれば狡猾とも見られ　ゆづらん

涙ぐんでは又背をまげる支那奇術　絃調子

洋服を脱ぐまもあらず子守する　秀聲

これらも皆すて難い名句であると思ふ。


父の死　C 一四27　長女　二九18
珍客　四〇13
父　四八66　四九39
D
臺所　八18　五九28
獨酌　一五13
E
椽先　五五54
F
双夫婦　一四27　夫人　二四28
二七35　三八13　四三56　四六34
G
玄關　五九43
H
花婚　一16
母　一〇13　三一41　四九59　五四51
早起　四九55　初風呂　五〇53
花嫁　五三50　引越し　五四56
I
妹　二16　一三12
板の間　三21　五二55　五七54
J
次男　五七49
K
子持　二6　子守　一四22
子子　三九46　子供　四三57
子澤山　四五50　國の親　七16

# 各地柳壇

## 川柳雑誌社　四月例會

四月四日夜　於日本橋倶樂部

花や踊に春の夜は惱ましい。本社例會も稀に見る少人數であつたが、路郎主幹の漫談に一刻千金の夜を味はつた。(二柳子記)

(參會者)

路郎先生、テルホ、悟空、狂雨、公二、善治、四五磨、孤舟、正二、突支坊、苦香瓏、琴人、紋太、卯生、九三也、萬樂、槍雨、里十九、卜居、喜由、嶺月、麥郎、たけし、山雨樓、かほる、陽喜亭、助六、文蝶、沐天、卯三、小六、つばさ、雪峰、黒天子、太閤、山都、露斗、萬よし、鶴峯、二柳子

兼題　大　金　路　郎　選

大金に体裁などを考へず　鮎美
大金はあたためられつあたゝめつ　里十九
大金の行衛は夫婦氣取なり　黒天子
重役が取るボーナスの當なりし　山雨樓
大金の二錢の利子にさばかれる　太閤
大金をもつて平氣な歩きぶり　迂生
大金へ父の氣性を其のまんま　槍雨
大金を觸つて見れば無事であり　突支坊
大金が知られど妻子も有るぢやない　たけし
贈られし大金遺族氣も折れて　陽氣亭
信用をすべく大金過ぎるなり　紋太
銀行の金庫あるぞと云ふかまへ　露斗
大金はとても持つてぬと使つて居　鶴峯
大金で落籍した割に鼻につき　九三也
我ものでもない大金をしかと抱き　テルホ
大金を持ち出してから一ヶ月　健秋
幇間をいやがらす程馬鹿遊び　萬よし
おかしな氣だと紙幣束へ考へる　琴人
どれほどが大金なのか長者の子　同
屈託のないのへ當る二千圓　萬樂
大金の使小便したくなり　同
大金をとゞけて無事を喜ばれ　文蝶
大金に異なし春の恨めしく　同
大金のかゝる旦那の異な趣味　善治
大金のまぶしさ理智が暗うなり　同
大金が寄附の一部になほ足りず　嶺月
犯人とその大金を撮される　同
大金に舞妓ばかりに取り卷かれ　かほる
百圓を扇ひろげるように讀み　同
大金だしつかと持てよこれ伴　公二
貸す方が大金にする五圓札　同
金が物言ふ世の中だ貯めてなこ　小六
金たんとためて浮世を笑わんか　同
大金ですなと上かんや酒をつぎ　二柳子
大金のおもみを給仕提げてみる　同
(人)大金を預つてゐてつき合へず　善治
(地)大金を減らす女がついてゐる　悟空
(天)雜沓を眺め大金ゆすり上げ　紋太
(軸)大金にこつちの事は聞いてゐず　路郎

席題　コップ　紋太選

手をたゝく方のコップは水がいり　山雨樓
洋食の外にコップを一つ云ひ　鶴峯
テーブルを中にジョッキとコップなら　露斗
仰向いたコップの先に値段書　迂生
すつきりと空けコップへ又つがれ　里十九
くよ〳〵と思ふにコップ冷たくて　たけし
冷え切つた水にコップがぬれて來る　二柳子
病人にコップの水が搖れすぎる　嶺月
妻も子もあらうにコップ酒を飲み　槍雨
口吻てくれたコップを嬉しがり　苦香樓
ニツケルのお盆にコップ六ツ乘り　かほる
許嫁コップへ水をくんで來る　同
命より永らへてゐるコップあり　失名
一杯であきらめてゆく生ビール　山雨樓
うまかつたコップの泡を見つめて居　迂生

コップの破れたも彼女の負擔　里十九
そのコップ機敷危いとこへ置き　孤舟
熟辯はコップの水に目もくれず　つばさ
まあ〳〵といふがコップが足らぬ　路郎
コップ酒飲んでしまつた音をさせ　狂雨
云い切れぬ儘にコップをグツトほし　テルホ
酔うたなとコップがわれてから思ひ　露斗
ともかくも十錢ですむコップ酒　同
植木鉢コップの水で足りるなり　嶺月
細長うコップの數で運ばれる　同
愛の巣にコップ二つも嬉しい氣　沐天
コップ酒喉へ波打つ馬方や　同
コップ酒數を忘れた金を出し　悟空
下女の手にコップの水はふるえてる　同
(人)正直にコップは注いだ色になり　文蝶
(地)新世帶コップが殖えて夏が過ぎ　陽喜亭
(天)相容れぬ思想コップへ注いでやる　テルホ

席題　長病ひ　山雨樓選

長病い其の看護婦になじんで來　鶴峯
不治の病へカナリヤの啼く　槍雨
手紙だけ書けますと長病ひ　二柳子
夕燒け續けど長病ひの淋しさ　陽喜亭
長病ひ天理教にも見放され　つばさ
長病ひ今年の夏が案じられ　卯三
此まゝ俺は死ぬのかとも思ひ　悟空
友達が忘れた頃も病んでゐる　テルホ
なほるやうしれぬ病へ春の逝く　山都
長病ひけいこの三味をうろ覚え　萬よし
長病ひ片輪にならぬ願に生き　紋太
春が來て自信を持つた粥を食ひ　路郎
長病ひ一丁先が霞む春　孤舟
看病の妻にすまなく病みつゞけ　同
長病ひ取り殘されたように生き　黒天子
可愛さは代つてやらう長病ひ　同
長病ひ母のやつれが目立つて居　助六
孫殖えるばかり長病ひに冬　同
死にたい〳〵と長病ひの口　かほる
(人)そろばんを長病ひへ持つて來る　琴人
(地)天井へいつよくなるのあてもなく　萬よし
(天)死ぬ氣にもなれず中風の花を見る　山雨樓
(軸)來る手紙長病ひの眼に熟し　選

席題　造花　互

造花又去年の春の春になり　蓼郎
造花屋で電燈工夫茶をよばれ　槍雨
この店もあかん花輪があせて來る　萬よし
くもの巣に守られて居る造花　卯生
開店の髪が造花へひつかゝり　孤舟
針金が見へて造花の葉が取れて　かほる
捨てられた造花はっきり咲いたまゝ　助六
舞臺には造花と別な花が散り　善治
舞臺一杯造花で幕があき　琴人
うつかりと造花へ蝶々飛んでくる　喜由
悲しき思出よ造花散らばり　たけし
うまい事出來た造花へ葉が足らず　文蝶
妹の智慧で造花がふえて居る　悟空
慰めてくれる造花の色があせ　山雨樓
子守唄造花へ一寸手が伸びる　狂雨
造花爛漫女給の手が足らず　紋太
やりどころない眼には造花の赤い色　テルホ
天井の白さが目立つ造花なり　嶺月
照明が春の造花を引きたゝせ　同

席題　家　並　互選

文化村アンテナの有る家ばかり　露斗
金持の藏でかげつてゐる家並　山雨樓
家並がつきてこゝから春らしい　卯三
むさ苦しい家並へ女給消えて行き　黒天子
家並に五錢の寄附が續くなり　二柳子
家並からバケツを提げた人が出る　かほる
家並のはづれで御用見失ひ　善治
家並に寒行暫し門に立ち　鶴峯
家並の春をさへぎるビルディング　山都
思ひ出は昔の儘の家並なり　テルホ
家並森閑としたやの京の町　琴人
文化村みんな南へ向けて立ち　露斗
家並もつきて田圃廣がり　四五磨
材木屋家並の中に背が高し　悟空
家並にしてをきますと寄附をする　つばさ
家並にポートーばかりの町になり　突支坊

川柳雜誌社
守口支部　**創立句會**（大阪）

三月二十日　於守口町勇湯　石川双葉子報

兼題　花見　路郎選　里十九

少々は自暴も手傳ひ花見なり　觀月
花見酒他所のお方の酒をうけ　鮎美
れころべば花見る樹が顔へくる　濁水
掛茶屋に花をへだてゝ友と酌み　卯三
花の宴深川やつてけつまづき　萬よし
花の留守反逆性を非認せず　双葉子
遠乘りは花見の客を逃すなり　丸葉
精勤なだけに花見も愉快すぎ　笑哉
酔ふてゐる父をひつぱる花の山　貴山
花見には誘ひますよと酔ふて去に　舟々
花見の埃よ母をいたはり

花見の賑ひ丁稚に行く身也　同
われ一人樂しむ花の美しさ　源坊
お花見に行かぬ先から母つかれ　ひろし
暮れの鐘花見に寒うひゞいて來　孤舟
暄嘩とは知らずに櫻散りかゝり　彩秋
生き甲斐のある花見の日から知り　二南
花も見る通る娘の顏も見る　文惠
花の山娘大きくよけて逃げ　河矢女
花見客だけで輕便動いてる　藏六
お花見が二日がゝりで歸つて來　松汀
花の山下つた迄は知づてゐる　柳月
花見時ひるのお青樓の淋しくて　新水
花の雲　歩く　二人に塔が見え　同
好きな柄明日の花見に間に合はず　同
(人)花見から信用のない人になり　かほる
(地)花見より五圓の方がよろしいな　加香
(天)花見までになほる〳〵と慰める　桂風
(軸)花見にやりましたと亭主手習　路郎
(同)お花見に次男置いてけぼりだな　同

席題　姿　見　萬よし　選

姿見へ二三度當る帶の端　かほる
姿見の埃へ頭文字を書き　京郎
姿見に立つて明るい應接間　舟々
姿見に母と心が違ふなり　双葉子
姿　見へ夫半分だけ映り　源坊
姿見へ嫌なお客を逃げてゐる　愚陀
姿見にうつる　づぼんのしわ　武子
姿見へ不安な帶をしめてたち　桂風
愛の巢の姿見だけが大きすぎ　貴山
姿見へ母に濟まなく帶をしめ　テルホ
姿見へ一錢ほしい子がうつり　丸葉
髮結の世辭を殘した姿見　新水
姿見へ夫は腰を掛けてまち　ひろし
姿見へこんどは後ろすがたなり　彩秋
姿見へも一度念を押しに來る　同
姿見へきたない顏がほふて來る　毒仙
處女としての姿見に秩れ　同
姿見を出しつぱなしの學校出　路郎
(人)姿見をなんべん見ても年は年　加香
(地)姿見へ行くあてのない顏を出し　路郎
(天)姿見へ嫁ぐ姿になつてたち　かほる

席題　女　湯　互　選

ぬる事を覺へて女湯から出る　舟々
女湯は小さな聲でまだつゞけ　源坊
帶しめる間も女湯の喋り拔き　萬よし
れんれこを着せて女湯または入り　貴山
近所のうはさ　女湯から聞こえ　双葉子
泣聲へぬくもりきらぬ母が來る　孤舟
女湯のあつちこつちで泣かせてる　ひろし

席題　度　胸　新水、双葉子共選

度胸のよい母親にそだち　武子
それほどの度胸もなくて金を溜め　琴人
決鬪の朝を一人は未だむむり　孤舟
度胸ある人を見られて尙喋り　萬よし
警察へ度胸は据へて來たものゝ　鴻堂
度胸のない男となつて家にゐる　舟々
俺れの子にして度腕ありすぎる　桂風
女には要らぬ度胸を母思ひ　毒仙
さいそくへケチな度胸を見せて　丸葉
その度胸ならと大任まかされる　卯三
看護婦の度胸煙りを貧ふて逃げ　路郎
度胸あるならとは相手いゝ度胸　源坊
喰ふための俺れの度胸ほめられる　テルホ
念を押されて度胸をうち　同
後半生は度胸をすへる氣か　武子
子供とは思へぬ度胸ほろりさせ　ひろし
落ちぶれまゝに度胸も出來て來る　彩秋
あやまつておいて度胸の奥を見せ　貴山
(人)度胸の太さ親類から離れ　舟々
(地)見込まれた程に度胸のない養子　孤舟
(天)その夜逃げ度胸があつた譯なし　路郎
(人)好い度胸大きく鼻をかんでゐる　かほる
(地)もう一度度胸をきめ逢ひに行く　舟々
(天)有りたけの俺れの度胸はまだまだ　彩秋
(軸)十年の昔に變る度胸もち　新水

川柳雜誌社
加古川支部　**耽柳會**　參拾壹回**例會**（兵庫縣）

水田黃彩報

加古川支部めだか吟社を耽柳會と改め第三拾一回句會を黃彩居に於て開催す。

席題　壁、口笛、指　互　選

壁だけは昔の儘で殘つてゐ　泰山
つくれんと壁にもたれて物思ひ　尾秋
壁一重へだてりや別な生活なり　同
壁土を左官腰からふわりうけ　黃彩
日曜の父が左官へ土を持ち　同
壁のしみ馬鹿に氣になる旅の宿　五彩果
春の香に口笛まあるく包まれて　黃彩
しかられた小僧口笛ふいてゆき　同
口笛を吹きたい程の麗かさ　洛陽
上品な野次口笛を吹いてゐる　尾秋
口笛を越して愛犬闇へ消え　五彩果
思ふだけ云はないさきに指がふれ　同

立たんとす幼兒の力足の指　同
大　枚二百圓也指にさし尾　秋
指先がみてゐる樣に利いてゐる　泰山
失業者やわらぐ指をなぜてみる　黄彩
看護婦の指のつめたい　朝の脈　同

川柳雜誌社
松山支社

## 四月例會（松山）

二月六日夜於金龜館樓上　淺井冷々子報

參會者二十四名見頃の花時である明日を氣遣はれる春雨は止めどもなく降續いた。一同しつぽりと句作に耽る。岩本素人先生の「漫畫と川柳」と題する有益なる講演があり、益する事少なからず。（前月の兼題希望を發表す

兼題　希　望　路　郎　選

國を出た希望　吉原見て歸り　柳花坊
東京の春校門へ押し寄せる　轉德利
希望皆捨てゝ萬年次席なり　大樓
聞くだけに過ぎぬ希望を聞かされる　參村
希望とは甚だ遠く卒業し　○美
妾宅は希望通りの子を孕み　鷄牛子
政權をサラリと捨てゝ土に生き　蛙の眼
希望なら仕方もないと親は頁け　つよし
子がしんでからの希望がちと變り　青水
御望みと勿体振つた二の替り　雨眠
紹介所希望を聞くに骨が折れ　時雨樓
希望を述べて課長にゝらまれる　矢名
榮轉に希望でもない寒い國　素泉
（人）空想と終らん齢三十五　鐵洲
（地）恩給になつて希望の小さい事　大樓
（天）母親の小さな慾を笑ふまい　町二

兼題　夜　櫻　水　樹　選

夜櫻の騷ぎが耳につく宿屋　秋無草
雪洞の光る所だけ咲いてゐる　陽帆
其のまゝでよいと夜櫻誘はれる　喜峰
夜櫻へせん方もなく妻を連れ　柳花坊
微笑の樣に夜櫻月に浮き　花之助
夜櫻にまう退院が近くなり　雀坪
夜櫻へ女房たま〳〵誘はれる　十四公
夜櫻に埃をはたく睦じさ　冷々子
宿直の管夜櫻で見付けられ　雨眠
夜櫻は淋しいものと懷手　同
夜櫻の電燈雨を白う見せ　時雨樓
夜櫻は女房と見るものでなし　計加
夜櫻はクッキリとして浮いてゐる　五健
道ばたの櫻提灯さし揚げる　かき松
生醉がゐて夜櫻も面白い　春波
夜櫻に又誘はれる二階借　巨城
夜櫻でなやましい事見て戻り　素人
アーク燈避けて櫻に一家族　冷々子
（五客）夜櫻へ妾の望み通りさせ　五健
（同）夜櫻へ男名前の連れがあり　十四公
（同）次會の氣で夜櫻へ腰を据え　計加
（同）夜櫻の中をハーモニカ縫ひ行き　壷雪
（同）夜櫻へ來て廣告を探がしてゐる　柚闌坊
（人）夜櫻に持つパラソルは武器と見る　時雨樓
（地）夜櫻へちと若過ぎる妻を連れ　素人
（天）夜櫻を一人り芝笛通り拔け　水樹
（軸）夜櫻に書の催しきかされる　素人

兼題　罪　選

嚴格の返つて罪の子をつくり　極光
どこ迄も罪の臍本ついて來る　三雪
白粉は罪を塗り消す樣に塗り　柚闌坊
犯してる罪を世間に憚からず　紫南
罪人に決めてしもうて四段拔　水樹
冤罪は唯すまなかそれつきり　柳花坊
罪人になつて解つたローマンス　失名
罪の無い若樣ですと馬鹿にされ　雨眠
罪人に今日一日の小豆飯　素泉
珠數つなぎの罪人に犬が吠え　計加
あの人がまさかそれでも罪は罪　時雨樓
罪と知り去らぬ煩惱横戀墓　川の字
罪の子に親の看せたいものが有り　武子
深編はカメラをさけたまゝ寫り　秋無草
懺悔さへすれば救はれる樣に言ひ　同
申立正直過ぎて罪に落ち　冷々子
寛大に罪をにくんで涙金　十四公
家出して罪人の樣に言はれてる　武子
だんまりて居ても自責をしてるなり　巨城
ぬれぎぬを唯泣いて居る美しさ　五健
罪の無いものなら罪も面白し　同

席題　宿　選

木賃宿　訛を眞似て笑ひ合ひ　五健
相宿の人に初旅寢付かれず　かき松
宿屋では毎夜鼾が留守居なし　巨城
名士もう宿へ着かない内に知れ　兩桂
醉さます宿の二階を開け放ち　冷々子
宿帳の先客を繰る一仕切　花の助
目標しが有田ドラックになる宿屋　時雨樓
宿帳は明日のお發ちへ念を押し　秋無草
宿きめてから石段登り行き　雨眠
泊るのにきめて盃さし直し　三雪
宿を出て置いた茶代が惜しくなり　素泉
（秀逸）本船之宿屋の提灯くずれて來　鬼笑
壷雪

(同)夫婦者にせられて二人宿を立ち　陽帆
(同)宿帳に何と書いても夫婦なり　武子
(同)どの宿も落付かず團體解放し　時雨樓
(同)どうしても讀めぬ宿屋の襖の書　素人
(人)船宿り互い違いにちどこまり　三雪
(地)奚望を集めて風く宿の象　水樹
(天)宿帳へ一寸迷す事を書き　玄々子
(軸)ゆつくりと編上を履く宿の音尾　五健

席題　水加減　互選

嫁いぢり先づ水加減から切め　一止
新夫婦ノートを出して水加減　兩桂
水加減きまつた樣に出來てゐる　武子
亭主の小言で困る水加減　春波
水加減此のきり迄と指を出し　素水
寄宿生程よく慣れし水加減　香芳
新世帶毎日違つた水加減　陽帆
隣から水加減に來る妻の留守　三雪
水加減亭主の方が上手なり　素人
水加減ちとやり過ぎた絹糸草　秋無草
水加減自炊の腕を見て貰ひ　水樹
水加減して母親の手内職　極光
入れる手へ加減の水はふえて見へ　壺雪
水加減いゝかと舟の甘藷の飯　雨眠
ちと水が過ぎてお粥の樣になり　玄々子
水加減指輪のあたりそのあたり　五健
水加減釜の癖にして仕舞　巨城
水加減亭主仰山さうに見る　時雨樓
水加減亭主産所へ聞いてゐる　かき松
水加減教へて女房里へ行き　同

川柳雜誌社　梅田支部例會（大阪）

鷲　川村觀月報

互選

えものあり鷲大空に輪をえがき　健坊
學校の標本箱に鷲は住み　香仙
鷲の巣に宿無鳥がきてとまり　卜居
たまに鷲巡視をしてるや嘉に舞ひ　觀月
鷲何も喰はず岩からながめてる　石竹
鷲も眠つて月は澄みきる　鮎美
ロケーション本當の鷲が飛び來り　賀名芽
眼をとぢたまゝで動かぬ網の鷲　同

兼題　植木鉢　かほる選

日あたりのよい飛石に植木鉢　健坊
植木鉢もう落ちそうな柵に咲き　觀月
植木鉢あけるとみゝず住んでゐた　石竹
植木鉢さかひに猫のにらみあい　里十九
植木鉢椽の下より出されたり　同
植木鉢つぼみが出來て位置を替へ　鮎美
一坪の庭にいろ〳〵植木鉢　同
植木鉢高う買ふたが枯れてくる　卜居
植木鉢自分の物もびて來る　同
植木鉢さゝげた腰はのびてゐる　同
植木鉢一つ咲かない鉢ができ　賀名芽
植木鉢三つ重れて秋が來る　同
應接間今を盛りの鉢を据え　同
(人)植木鉢兩手でもつは買ふ氣なり　觀月
(地)來年もきつと咲きます植木鉢　同
(天)物干に一つ立派な植木鉢　同

川柳雜誌社鳥取支部　川端柳社句會（鳥取縣）

三月十五日　於蓬萊館　中島鐵洲報

兼題　草　鞋　舌　長　選

峠路を固きつゝ草鞋履きかへる　佳水
今日も旅草鞋に殘る溫味　鐵洲
草鞋履く冷たさ都あこがれる　湖山
草鞋にはチト不似合な足のきめ　耕民
行軍に草鞋ゆ五足目立てゐ　青水
(軸)自動車を草鞋の吾は嘲笑ふ　舌長

兼題　藥　聽松選

藥のむぬ事も上手にやせて居る　源太夫
藥局へ元氣な聲は藥取り　のぼる
廣告の藥に迷ふ程に病み　湖山
藥飲む吾が身に春の麗らすぎ　耕民
是れ丈で死ぬる藥の馬ふらしさ　同
隱居の間に煎藥の匂ふてる　一風

兼題　人　形　互選

泣き寢入る子に人形が抱かれてる　源太夫
話してる娘人形が相手なり　耕民
人形をかゝへて連をさがしてる　住水
人形を負ふに鉢卷してかゝり　伯山
やるせない戀人形に話してゐ　鐵洲
ウインドの春人形に裝はせ　一風
永別も知らず人形晴れた顏　聽松

席題　袋、エレベーター　互選

輕ひ咳琴は袋のまゝであり　鐵洲
見物に來てエレベーター登り詰め　青水
お上りはエレベーターを見たばかり　暢山
エレベーター奈落の底に落ちる樣　のぼる

川柳雜誌社　糸屋町句會（大阪）

三月十八日夜　於寶業會館　川合舟々報

支部同人島田翠峯君が病臥してならるゝので病床を慰めるため、「病床」を課題同君に

贈る事にした。

兼題　父と子　毒仙選

子のために稼ぐんだ寢ておこう　卯三
淋しさは父の形見を着せられる　テルホ
選暦を過ぎても父は店に居る　源坊
責任を持たせて父はどつと老け　同
知つてゐる父貧しさに追はれ　赤城
貧しさの中に尊い父の影　同
お父さんは遠い所と思つて居　舟々
電車から下りて父はほつとする　同
(軸)父と子に仕へてマゲサ豐かなり　毒仙

席題　春宵　蒼梧樓選

默々とどこまで行くか春の宵　テルホ
ランニングぽつ〳〵走る春の宵　小六
春宵を女の髪にあこがれる　双葉子
兒のことにいさかい春の宵を出る　同
春宵一刻戀に疲れる　舟々
春宵既に都の者となり　同
(軸)窓の灯のなまめかしくも春の宵　蒼梧樓

席題　亀　選

亀の群みんな落ちこむ石つぶて　双葉子
一匹の亀めづらしく人が寄り　つばさ
亀の山時々崩れ落ちる音　蒼梧樓
小亀親亀彼岸が近くなり　赤城
なごやかな光の中に亀の息　同
放された亀ほろ酔でぬき手きり　卯三
宙釣の亀は六法踏む形ち　同
鋏にあせる亀とは別にあんで居る　小六
鯉つりに亀ひつかゝりひつかゝり　同
てれくさい中へポツカリ浮いた亀　テルホ
まだ拗た儘で見て居る亀の甲　同
漸くに小亀やつこらやづと起き　源坊
亀の浮くたんびに搖れる藤の花　同
ラクビーの型でとり合ふ亀の池　舟々
人の好い顔も立つてる亀の池　同

席題　病床　互選

好きなもの好きな所も癒つたら　舟々
病床の妻へぶざまな粥が出來　蒼梧樓
スリッパの音夢を絶ちたり　毒仙
病床へ凝つた刺繍が屆けられ　源坊
病床の日記うつかり日を遂へ　同
病床の淋しい顔に陽があたり　小六
ちとふるう手で病床は何か書き　同
病床に疲れも見せず國の母　卯三
病床に近づく足の靜かなり　つばさ
病床で聞く友のいゝ噂さ　テルホ
病床の眼には廊下のはてしなく　同
安治川の笛病床に起き直り　赤城
かゆの湯氣淋しさに目をつむる　同

川柳雜誌社

## 堺支部四月例會（堺）

四月十一日夜　於大濱家族湯樓上
（參會者二十一名）

友淵貴山報

兼題　反り橋　かほる選

架け替へてゐる反り橋を行きゝ子　一杉
反り橋へ子は眞先に匍ひ上り　五輪
反り橋の主人へ犬は吠えてゐる　清路
反り橋のもう一足を飛んで降り　さだを
反り橋を渡る團体ちり〴〵に　不言
反り橋を見上げて老婆背を伸ばし　格子樓
やかましく反り橋渡る女連　不越
上つたが降りるにこはい反り橋　瓢山
夫婦連分れて渡る反り橋　同
(人)反り橋を下れば父の手が伸び　松風
(地)顔に筋立てゝ反り橋降りて來る　蔓草
(天)反り橋へ叱つた姉も上りたし　松風
(軸)反り橋を渡るとおせんわれてゐる　かほる

席題　指サック　多聞選

傳票へサック忙はしく動くなり　五輪
指サック大根を切り藁を切り　黒天子
澤庵がぶ厚く切れた指サック　月下
指サック丸めるやうに脱いでくる　不越
縫上げて仕舞たいのに指サック　又光
指サック今日一日の血が滲み　松風
初對面少し氣になる指サック　呑陽
あか切れの指にサックが縮りすぎ　同
(佳)指サック墨付いたまゝ請求書　不言
(佳)指サックぬがせば少し汗をかき　清路
(佳)指サック親切もうにソット觸れ　呑陽
(佳)鉛筆のさきにつかれて指サック　貴山
(佳)指サック醤油入れのふたが落ち　かほる
(軸)指サックお膳へのして叱られる　多聞

席題　仲仕　呑陽選

默々と仲仕は汗をシャツ拭き　蔓草
色街で仲仕の野暮な辨當箱　月下
愉快〳〵と仲仕酔うてゐる　清路
おとくいの時計を仲仕見て歸り　かほる
「三百斤ある」と仲仕は力んで居　五輪
仲仕には惜しい位な文字を書き　格子樓
バットなら吸ふと仲仕の大きい手　貴山
涙花節素人ばなれをした仲仕　不言
好きな酒飲めて仲仕をつゞけてゐ　黒天子

酒肥りしたのが仲仕頭なり　又光
藏の鍵鳴らして仲仕店を出る　同
(客)暮色を蹈んで仲仕の鼻唄　黒天子
(客)字の書ける仲仕代筆頼まれる　太路
(客)仲仕もう法被賣ろかと思ふなり　貴山
(客)吠えゝゐる犬に仲仕の酔うてる　多聞
(客)仲仕から仲仕へ餅が渡される　かほる
(人)目串燒く煙りに仲仕戻つて來　多聞
(地)後押しの仲仕の妻は老けてゐ　さだを
(天)親方に云ふときますと仲仕去に　かほる
(軸)汗拭ふ仲仕に派手なヲヤブバンド　呑陽

席題　輕石　不越　選

輕石が不必要なり若旦那　三絃
朝風呂で見る輕石の黒い事　月下
輕石の家鉢山へ置直し　松風
仕舞風呂輕石使ふ勇み肌　格子樓
男湯へ輕石の浮く終ひ風呂　不言
輕石を器用につかふ九文　呑陽
指の型ついて輕石凹つてゆく　一杉
手洗場輕石も有る鐵工所　加毛字
(人)朝風呂に來て輕石の閑を見る　多聞
(地)輕石を借つて石鹸使はれる　不言
(天)輕石の男の足にへつて行き　かほる
(軸)輕石の及ばぬ垢をためてゐる　不越

席題　遊園地　互　選

遊園地プランコに乘る氣にもなり　さだを
プログラム一枚落ちた遊園地　月下
遊園地どてらもまじるうらゝかさ　三絃
遊園地小さい方も歩かせる　多聞
遊園地二人の子供へ汗をかき　黒天子
遊園地子供忘れる若い母　加毛字
不景氣がつきり知れる遊園地　かほる
赤足袋を枝に釣るした遊園地　又光
遊園地キャラメルの紙パンの切れ　同

席題　眼藥　互　選

滲み込んで行く眼藥に頼のしわ　呑陽
眼藥は電話のベルに無駄になり　月下
眼藥を見せて花見の違約なり　松風
點眼器向ひの屋根が濡れてゐる　一杉
上向いて最初の一つ鼻へ落ち　黒天子
しみもせぬ眼藥はうたがはれ　情路
眼藥の色電燈のまばゆ過ぎ　太路
饅頭を見せて眼藥さしてやり　又光
神經衰弱眼藥をさしてゐる　三絃
眼藥の暫し奈落を馳けめぐり　多聞
眼藥は開いてる口をたしなめる　同

席題　消火器　互　選

(横)宿直の暇消火器をさはつて見　憂草
(大)申譯に置く消火器のたよりなる　格子樓
(關)無事な日が續き消火器省みず　太路
(小)消火器はほこりの儘に歳が暮れ　呑陽
(前)消火器の試驗學校の燒けた跡　又光
(同)消火器がつまらなく見ゑるビルデンゲ　三絃

## 川柳雜誌社　螢ケ池支部句會（大阪）

加藤柳月報

四月七日午後壹時より卯月句會を開催いたしました。當日は病友故北山蓑舟君の追悼句會として柳友各位が多數御出席を下さいました本社より先生方の御見えになられなかつたのは一入淋しうございました。

追悼吟　普門選

永遠に名のみ殘してこときれる　地湧子
絶對の孤獨は母を置いて逝き　瓢簞
春の日に未練も持たず死んでゆき　湖舟
御佛の側の御用は頼みます　柳月
(軸)佛を信じ安心は長し　普門

兼題　夜櫻　ひろし　選

信心はあさに夜櫻先にほめ　笑哉
葉櫻を破れ雪洞照してる　詩華流
灯のつかぬ櫻へ和した月明り　瓢簞
篝火へ吹雪のように舞つてゐる　福助
雪洞をつけた小枝へ子をあやし　白洋
夜櫻へあきらめられぬ雨が降り　茶樂
えり足の白さへ雪洞の光のび　阿矢女
夜櫻も見られず床に二年半　松汀
ちさぬけた顔で夜櫻見上げてる　みのる
兄妹は夜櫻だけで歸つて來　運坊
一坪の庭の櫻へ灯をともし　地湧子
夜櫻の人數が減つて「クサミ」が出　波紋
ほんのりと醉へば夜櫻更に良し　湖舟
夜櫻へ來て貧しさが阿呆らしく　普門

兼題　前借　ひろし　選

前借があつて虐使を忍んでる　良三
前借は女房も同じことを云ひ　承天
前借が有つて淋しい月給日　瓢簞
前借へ主人何んにも云はず出し　茶樂
前借の病んで濟まなく日を送り　福助
前借は借りられるだけ借りて見る　阿矢女
永く病み保險も先きに借りて居る　蝶呂久
前借をしても着せたい親心　みのる
竣工に近く棟梁借りに來る　光哉
前借をしてお花見の下駄をはき　湖舟

棟梁の内へ前借細う入り　波紋
前借が續き仲居のちとやつれ　普門
前借に女房が行つて埒があき　柳日
　席題　呼捨て　互選
呼捨てゝ工夫頭は吸ふて居る　波紋
呼捨てゝすごい聲の主人なり　憲美須
新任の課長給仕へ君と呼び　みのる
呼び捨にされて小僧のよく太り　湖舟

川柳雜誌社加古川支部　四月五日

## 耽柳會第卅二回例會（兵庫縣）

水田黄彩報

　席題　共稼　互選
共稼らしい法被が後を押し　黄彩
共稼蓄める心もなけれども　同
一服をして共稼呑ましてる　洛陽
敵討つやうな姿の共稼　同
仲人の談とちがふ共稼　茶山
共稼亭主の臀の輕いこと　同
共稼たまの休みに喧嘩する　尾秋
稼ぐ妻塗り過ぎるとは思へども　五彩果
共稼辯當二ッ待つてゐる　よしを
　席題　踏切　互選
番人が居る踏切は氣がゆるみ　泰山
遮斷機是非なく一服吸はされる　尾秋
踏切で葬儀二ッに斷たれたり　同
踏切の小犬にぶあない目が集い　黄彩
遮斷機にもたれて吸殼ふみにじり　同
花の春踏切番へ竹の皮　五彩果

## 紀元節吟行

二月十一日武田尾にて　北山悟郎報

武田尾の火鉢しばらくほつとかれ　靖弘
硝子一枚外は武田尾の水の音　十字路
汽車着いた武田尾女顔並べ　悟郎
武田尾で隣りの部屋が氣にかゝり　聞路
男女混浴を二助言いたがり　馬行
湯の宿の靜けさ肥えた仲居來る　同
武田尾のだんく　おもりなって來る　かほる
武田尾の二階の部屋にして貰ひ　同

第拾七回　四年四月八日夕於て　天下茶屋集會所

## 南海至誠川柳會（大阪）

竹内多聞報

　席題　孝行　路郎選
入營に孝行漸く世に出づる　格子樓
孝行は兄がするよと酔ふてゐる　一杉
親のため小守に安じつゝ杖ちて行く　格子樓
圓本に母の趣味をも考へる　貴山
孝行は出來ず兩親老ひ給ふ　萬年青
手の切れる紙幣で母親喜ばせ　一杉
電車にも乘らず孝行してるなり　貴山
二親が無事で孝行せずにすみ　黒天子
幼稚園もう孝行を考える　貴山
擴聲器孝行したる心算なり　同
僕十とさむうそうに解ふ蜆賣　五輪
(人)一緒に暮せば孝子たゞの人　多聞
(地)孝行を樂しにまだかたずかず　五輪
(天)咳いてゐる父を孝行見のがす　多聞
　兼題　逃げ腰　路郎選
逃げ腰と見て自動車へ押込める　萬年青
逃げ腰と見たメリヤスの喋舌る　多聞
爭議團もう逃げ腰の者もゐる　五輪
逃腰へあびせるお世辭痛いこと　樂居
　席題　合服　互選
冬服で今も通して金を溜め　萬兩
合服のあとから日傘ついてゆき　孤山
合服になれば少しは痩せて見せ　五輪
合服で淡路通ひの艪え立ら　一杉
のんびりとして合服の行くところ　貴山
晝からのぬくさ合服よみがへり　同
合服を着てポケットがちと重く　樂居
合服に大阪はよしアスファルト　多聞
大阪を出て合服に青い艸　同
合服へモー赤いインキ飛ばすなり　路郎
いふまでもなく合服も月賦なり　同
　席題　酔　互選
かた酔の話でウマが合ふてゐる　黒天子
酔つた顔重役室で眠つてゐる　五輪
エヽマヽヨ借金なんだモット酒　瓢山
酔ふてゐる人え硝子戸開けてやり　一杉
酔どれのこれが文かと思ふなり　貴山
酔はそうとして自分から先に酔　萬兩
ホロ酔のれがひ櫻よ散つてくれ　同
酔さめの炬燵の上に尻を据え　路郎
　席題　血判　互選
血判をする程までの約でなし　瓢山
親分と頼む血判芝居じみ　一杉
血判の名主の分は苗字なし　樂居
茶坊主へまで血判まはつて來　貴山
鮮かに血判を捺すいゝ度胸　五輪
血判へ殘るは若い人ばかり　同
血判の一人白洲で言はぬなり　萬年青
血判の同志は土え物を書き　同

血判はしたが 今更怖くなり 堅坊
血判がすんで 大石腹を割り 同
血判の誓ひ忘れて飲んでゐる 呑陽
血判の一人女房を思ひ出し 同
血判のたゞ沈默の人となり 同
血判に雨の襖が開かれる 多聞
血判に袴の裾を踏んで立ち 同
脇息を外し血判見つめられ 同

## 第十八回鼎座小集（神戸）

小鐵千鳥報

時間表　互選

電報へ減多に要らぬ時間表　紫庵
時間表ひろげて幹事もめてゐる　同
時間表見上げてバツト又喫ける　郊村
時間表ひろげて宿のホテムーン　紫庵
時間表丁稚大事に貰ふとき　千鳥
土産買ふ位い間はある時間表　同

枕木　互選

枕木をよけて春草伸びてゐる　郊村
枕木の白う夜明けの驛へつき　同
鐵橋の枕木ばかり見て渡り　紫庵
枕木もたいて土工の靈にする　千鳥
枕木の強さは鐵の色に似て　同

提灯　互選

辻易者又提灯が消えかゝり　郊村
山腹で野施りの提灯が縺れてる　紫庵
提灯を消して見送り戻つて來　千鳥
修繕に提灯で來る電氣局　同

## 阿波座句會（大阪）

松盛琴人報

題　陰日、橋、職人、仲人、藤

陰日を内證にしなと念を押し　四五磨
陰日を云はれる位い氣に入られ　同
灰色が陰で就かれて變つて來　五笑
陰日をすつかり三毛が聞いてゐる　光
陰日にうきよのあかをなすり合ひ　電火坊
橋の上あまい話に更けて居る　四五磨
かけかへにカーブに出來た假の橋　五笑
橋に來たあんまの杖はつゝいてゐ　光
影二ツ動かぬ橋のほの暗し　電火坊
勘定日だけは感謝の氣もおこり　五笑
江戸ッ子で職人あらい言葉也　光
職人は裸になりて貸してやり　電火坊
仲人は儀式を知らず暇がいり　四五磨
まとまらぬ話に仲人幅をほめ　光
仲人が當てられてゐる仲の宜さ　電火坊
椽へ出て藤咲いたのを伯父に見せ　光
藤色の衿に女の若さ見せ　電火坊

## 丸龜わかて川柳會（丸龜）

平澤ゆずらん報

使

すれた子は他所の使ひをして戻り　水川浮沈子氏選
雪降りに忙がぬ使へ下女をやり　無食子
滿員の電車で使ひ汗を拭き　甘々坊
頼まれた使を頼のむ骨措しみ　三尺野
出し拔けの使電話が役に立ち　仙流
叱られて使に出ると連れが出來　吉峰
母親にれだる使は的てがあり　吉峰
(人)其處迄の使ひに子供貢はされ　三尺野
(地)村芝居使ひの役が無理を云ひ　無食子

(天)釣り錢を云はれて使あはて出し　柚蘭坊

## 愚陀居偶會（大阪）

四月七日　伊藤愚陀報

金持・古本

金持に危險な記事が續くなり　愚陀
金持の塀の電燈が一つ增へ　かほる
古本に誤植が多い春の風　同
書留の受け取りが出る古い本　同
古本の落書だけを拾い讀み　愚陀
お面白いとこが古本破れてゐ　同

## 上町櫻井邸偶會（大阪）

櫻井如一報

四月三日午後

庄萬よし氏の來會を得て、川柳同好の同業者許り集合して川柳雜誌の募集句を課題として研究せり。

題　老夫婦　萬よし選

老夫婦買うたおすしは喰ぬなり　圓角坊
老夫婦行をしてゐる樣に生き　醉夢
嫁を見に小さな家へ老夫婦　圓角坊
老夫婦の喧嘩は足が觸れた事　同
老夫婦恩給だけで惜しまれる　呑介
五重相傳受けた夫婦の切れ話　醉夢
(佳)儿幗面な點で一致の老夫婦　圓角坊
(佳)瓢箪の艶によく似た老夫婦　呑介
(軸)何で暮してゐるか健な老夫婦　萬よし

題　宿引　互選

矢張りそうだつたと宿引の話　醉夢
宿引きは呑込顔に先に立ち　土筆
立ち呑みで醉ふと宿引一と理窟　萬よし
宿引きの何々館へ節をつけ　同

宿引きは口と腰とで客をとる　呑介
宿引きが割込んで小田原評議すみ　加羅巣
お客引き居ながら地誌の大家なり　荷月子

題　念　佛　互　選

知らず〳〵念佛の出た凡木橘　醉夢
うろたへて南無阿彌陀佛交叉點　呑介
念佛に時代意識の外の群　萬よし
念佛に子役本當に寒くなり　同
朝寢坊にこれきけがしの母の念佛　醉夢
家主殿念佛入りで座り込み　圓角坊
お小言の暇も忙しお念佛　呑介

## 名賀壽會例會（尼崎）

三月十日　中野支洋報

席題　湯　屋　互　選

風呂屋から今寢る姿歸つて來　暑岐
朝風呂で就職口を賴まれる　萬樂
小走りに湯屋へ急がす寒い風　吉期
番臺は流しの客へ景氣つけ　鴻堂
藥湯の能書利かぬ病氣なし　香翠
湯加減へあゝ極樂と長う延び　きくを
冷えますとお妾さんの藥風呂　虛白
草臥れた丁稚濁つた風呂に來る　孤舟

席題　產　婆　東　北　選

子澤山產婆の樣になれて來る　秀聲
賴母しい產婆の後ろ姿なり　孤舟
一息と云ふが產婆の癖となり　瓦之祐
此の上は產婆醫者をば呼ぶときめ　眠聲
散歩から產婆の家を覺えて來　壽郎
御近所にあつて產婆の賴りなし　萬樂
お名前はと產婆聞いてる六日だれ　きくを
婦人科で產婆の家を敎へられ　吉期
（佳）うろたへて使產婆とすれ違ひ　陽喜亭
（佳）新開地產婆の家が目立つなり　鴻堂
（佳）とりあげて譽める言葉を考へる　斧葉
（人）子を產むを產婆となつて恐くし　木三
（地）鼻息が荒い產婆に男の兒　瓦之祐
（天）頁ふた子を產婆に見せて立話　吉期
（軸）女房が產婆で餅が食ひ切れず　東北

席題　ネクタイ　虛　白　選

ネクタイへ焦れて出勤迫つて來　鴻堂
旋風器顏にネクタイ舞ひ上り　斧葉
ネクタイの何でもよしと年をとり　月男
會ひに行くそのネクタイにてまがい　九葉
ネクタイの派手な色妻氣に入らず　如竹
ネクタイを褒めて女給が酌ぎに來る　孤舟
ネクタイを結びながらに友へ詫び　陽喜亭
ネクタイへゴクリ動いたのご佛　瓦之祐
遲刻する朝ネクタイの結ばれず　眠聲
上役になつてネクタイ地味になり　きくを
ネクタイを女房が選れば派手過ぎる　柳堂
ネクタイを結ぶに少し首を振り　忠八
（佳）ネクタイへ汽船の笛は强うなり　柳堂
（佳）蝶結び横へ廻して醉つて居る　きくを
（佳）ネクタイはゆるんだなり終電車　突支坊
（人）履歷書とネクタイの柄くらべ　東北
（地）ネクタイを歪め遲刻汗を拭き　萬樂
（天）ネクタイも汚れ北風を戻つて來　明果
（軸）ネクタイを細う結ぶを父は老け　虛白

席題　牛　襟　陽喜亭　選

牛襟を買ひに小牛日を暮し　鴻堂
牛襟へ亭主の趣味も少し入れ　柳堂
牛襟へ母の見立が氣に入らず　突支坊
牛襟屋こんよく見せて一つ賣れ　柳笑
桃色の牛襟京は花盛り　眠聲
女房が行くと去年の襟を吳れ　萬樂
一枚の牛襟に妻折れて居る　きくを
牛襟を更へて嬉しい宵を出る　壽郎
（佳）牛襟へキハツの足らぬ長襦袢　瓦之祐
（佳）牛襟へ亭主相槌打つはかり　柳堂
（佳）牛襟を袖口に直す若い母　斧葉
（佳）縫付いて地味になつた姉の襟　虛白
（人）姑に買ふ牛襟に氣を使い　孤舟
（地）牛襟のすきな柄から色があせ　瓦之祐
（天）牛襟が汚れて下女に廻つて來　孤舟

席題　甘　酒　孤　舟　選

怪談へ甘酒の聲遠く聞き　きくを
甘酒を上手に作る母なりし　木三
甘酒の數へ小供が一人增え　萬樂
甘酒屋浴衣の客に呼ばれて居　眠聲
歸省して甘酒の味なつかしく　虛白
甘酒屋少し手につく剩錢をくれ　柳堂
お變りの甘酒うすうなつて來る　吉期
甘酒屋暗い葭簀の影で呼び　突支坊
甘酒へ忘れた杖に孫をやり　陽喜亭
甘酒や背の兒一度おろされる　壽郎
女連れやつと見付ける甘酒屋　同
（軸）甘酒屋子守に留守を賴むごき　孤舟

兼題　餘　裕　眠　聲　選

諦めてしまへば餘裕出來て來る　柳笑
ボーナスはとはしたを殘し定期とし　突支坊
餘裕あり金あり女惚れて居る　鮎美
先頭の足亜餘裕見せて居る　萬樂

## ▲飴二合

かほる

私が店番してゐます處へ學生がアルミのおべんを持つて來て

「こゝへ飴を二合入れとくなあれんか」

學生ですから二キロとか二グラムとか云ふんだと思ひますとそれに二合なんて…

## 菜種吟行

五月五日午前十時(第一日曜)京阪守口驛前出發

清流淀川に沿ひ河内平野の菜の花を稱しつゝ佐太天神の名所を訪ひ枚方樂園にて解散の豫定

行程　約三里

(乘合自動車の便あり

辨當御持參電車賃自辨のこと

主催　川柳雜誌社守口支部

中々末賴もしひ學生だと思ひました。飴を買ふお客さんは皆五十目。百目一貫目と云ふて來やはりますのに……二合なんて生まれて初めて聞きました。面白う御座いますね學生は桃中の帽子をかむつてゐました。

---

女房の　餘裕　月　掛講に入り　香翠
餘　裕　綽々　重役の盲判　盧白
一着はテーブを切つてまだ走り　陽喜亭
横綱の餘裕を見せて勝つ初日　十五夜
一疊へ投手餘裕を見せて投り　柳堂
トランプへ餘裕を見せる合宿所　壽耶
餘裕などちよつともないと肥で居る　木三
着流しで來た大島の餘裕振り　瓦之祐
(軸)忙中閑宿の亭主と碁をかこみ　眠聲

兼題　踊　り　瓦之祐　選

二次會は涙花踊で氣が揃ひ　萬樂
ステヽコになつて社長も手を叩き　柳堂
廻り藝課長さう〳〵踊らされ　悟空
三味線へ踊りの影が折れまがり　孤舟
踊り着のまゝ姐藝者醉ひつぶれ　きくを
この次はうちの娘が出る舞ひざゝ　萬樂
老ひの腰延ばして踊りよく踊り　秀聲
總踊皆んな同じ顏に見へ　月男
踊り子の舞臺のまゝで貴賓席　突支坊
はる〳〵と都踊へ母を呼び　明果
太鼓持祝儀へ如才なく踊り　鮎美
ダンサーのジャズにも憂く立ち上り　木三
(五客)憧れの踊へ舞妓寒う立ち　きくを
(同)懷手鱠すくひのビラへ立ち　同
(同)二味が出て花見四五人立上り　陽喜亭
(同)返盃をそのまゝにして總踊り　東北
(同)踊り子へ口三味線が痛をたて　鴻堂
(人)花道を引き込む踊子の目つき　東北
(地)踊子がこけて見物嬉しがり　暑岐
(天)手拭があれば踊つて見る積り　忠八
(軸)ふゞ漬の味を踊子話し合ひ　瓦之祐

席題　陸軍記念日　互選

勳八等三月十日に旗を出し　木三
記念日のラヂオ戰況交ぜて居る　吉朗
模擬戰へ紅一點の女學生　明果
記念日にサーベル一つ買はされる　萬樂
記念日に長屋から出る松葉杖　孤舟
記念日にやつぱり歸營時間あり　東北
癈兵は思出多き今日を醉ひ　陽喜亭
子供から陸軍記念日敎へられ　鴻堂
記念日に父の位碑を見せて居る　柳笑
模擬戰の上を飛行機低く飛び　壽朗
癈兵も今日は嬉しい顏で寄り　柳堂

## 呑陽居鼎座吟

四月十六日　友淵貴山報

勸　定　多聞選

勸定がすんで一服付けてゐる　さだを
勸定の通り月賦の請求書　貴山
勸定の憐座敷に皿の音　呑陽
(佳)勸定へ女給も一度注いで吳れ　同

菓子折　多聞選

菓子折へもう末の子はれだつてる　さだを
菓子折の希望を言つた丈けの事　貴山
菓子折に女房の腕を疑ふな　呑陽
(佳)菓子折を横に履歷書くたびに　さだを
(佳)菓子折を開けて轉勤手傳はせ　貴山
(佳)菓子折に女房の愚痴を聞いた　呑陽

暗がり　多聞選

暗がりの露次でも一度尋ねてる　さだを
暗がりに吸ふ敷島の灰が落ち　呑陽
暗がりにコツプ冷たくさはるなり　貴山
(佳)暗がりの一人は土產直してる　同

# 編輯後記

▼花が咲いた。花見電車が衝突した。花が散つた。既うそろそろ新緑がいゝなどと聞かされるばかり。これが此の頃の私。花と云へば向ひの庭にたつた一本八重が咲いてゐるのを、それも散る二三日前にフト氣づいたに過ぎなかた。

▼春はなやましい。原稿紙の上をすべる萬年筆の音さへなやましい。水枕をして原稿を書かればならぬ春よ。早く逝け〳〵。

▼本號は花菱、紋太、倉二、瀧明の諸名家が筆をそろへて寄稿された。柳壇のため同慶に堪えない。同人好古も忙しい中から住吉御田の神事を書いてくれた愛讀を祈る。好古は川柳雜誌社の省二氏である。持病の喘息になやみ自分で注射するところまで似てゐる。引續き書いてくれることになつてゐるが、又々持病が出て弱つてゐる。同情に堪えない。素人も唯我獨尊を書いて氣を吐いてゐる。

▼「近作柳樽」の投句が多數になつて行くことは嬉れしいが選に多くの日數をとられ過ぎて外のことに支障を來すやうになつたそれで今後は投句數を十句限度にした。

▼川上三太郎氏が「新川柳大觀」といふ川柳集を出した。まだ見ないが才人のことであるから素派らしいものだらう。

▼長崎柳秀氏が四月四日、渡歐の途に上つた。今回は視察である。何れ專門外の收穫もあることゝ思ふ。本號の粒々集に採錄した同氏の句は立つ前夜に寄せられたもので、その熱心さをよろこぶ。（通信別項參照）

▼同人松丘町二君が松江から大阪に移つた。今後編輯校正などに力を盡くしてくれることになつてゐる。（路郎生）

▲本號の編輯は事務所で路郎主幹、二柳子、琴人、亂耽、鶴峯の諸君と私とで致しました。

▲賛助員長崎柳秀博士の渡歐送別會を三月廿五日戎橋はり半に開催、出席者は主賓柳秀博士と路郎主幹、二柳子、一徹、革郎銀水、弘道、興一郎、加香、萬よし、琴人の諸氏と私とでした四月四日午前九時四十六分發の列車で出發され路郎主幹、一轍悟郎の二氏と私が多數の見送りの中に川柳家として特に厚い握手をかはしました。

▲同人越村加香氏は四月八日北海道の旅に出發された。十一日附で「函館に着きました、山は雪で白いが思つた程寒くはない」との便りがありました。

▲東北川柳の大谷五花村氏は廣島の全國町村長會議に出席しての歸途四月十八日別府に遊ばれ本社別府支部を訪問されたが高松から津山へ廻られ大阪へはよられなかつた。

▲四月十二日には高木角戀坊氏十三日には小松支部の八田盛鐘氏が萬よし居を訪問されたが不在で失禮した由。

▲四月十五日玉むし吟社の松浦一松氏と井上一連氏が濱寺で擧行された大毎主催の庭球トーナメント戰に優勝されての歸途萬よし居を賑はされた。

▲四月十八日小松支部の上野錦水氏來阪、萬よし氏と會はれて快談の後東上された。

▲同人伊藤愚陀君は關西學院高等部に入學。

▲社友楊井二南氏は今春商大高商部を卒業紐育ナショナルシチー銀行大阪支店に勤務された。

▲同人萬よし老（庄健一）は社民黨南區支部設置以來既に數回演壇に立ち熱辯を振ひ、すつかり市會議員タイプで元氣横溢。

▲福田山雨樓氏はすつかり全快四日の本社句會にも、十日の月評會にも出席された。鼻下に髭を蓄へられ益々謹嚴。

▲金澤川柳會は四月廿一日正午から同市西町佛教青年會館で第六回北國川柳大會を開催。

▲廣島川柳會、吳川柳會聯合の下に紙屋町藥ビル五階で全國川柳大會を開催。

▲清水光風氏が今回社友となれ、京都支部のために御盡力下さる事となりました。

▲三好革郎氏はお勤め先の「經濟評論」の編輯事務が多忙のため退社されました。永らく本誌の編輯に盡して下さつたのですが事情止むを得ません、深く其勞を感謝致します。

▲西本三笑氏も店務多忙のため退社されましたが、川柳のためには相變らず御盡しになるとの事です。

▲螢ヶ池支部北川葭舟氏三月六日永眠。哀悼に堪えず。

▲三月號松山支部創立句會の出席者の内計加氏の名が漏れて居ましたから追加してをきます。

▲私は二十一日本號の校正半ばに亂耽、二柳子の諸君に後を御依頼して夜行で東上することになりました。（ひろし記）

## 投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の原稿紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

## 募集

### 第六卷第七號課題

五月五日締切
（各題十句以内）

▼白痴　前田雀郎選

▼丸刈　安井ひろし選

▼指輪　中澤濁水　水谷鮎美　共選

### 第六卷第八號課題

六月五日締切
（各題十句以内）

▼無口　蛭子省二選

▼ネクタイ　中野柳陽選

▼家出　酒井駒人　中見光路　共選

### 毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

### 社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

## 定價

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

## 廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和四年四月廿五日印刷
昭和四年五月一日發行

第六卷第五號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、（岡崎）石撃
（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅（松山）弘文舍

# 川柳雜誌社關係の人々

（順はろ〳〵）

## 賛助員

池澤樂居　伊藤彦造
大道弘雄　西原柳雨
岡本一平　大島濤明
片岡直方　蛭子省二
田中辰二　桑原京郎
吉岡鳥平　森東魚柳
嘉納純　川村花菱　川上三太郎　楊川洲馬
田中香涯　岡田三面子　相元紋太　井二南
田　清　安西杏三
長崎柳秀　安川久流美　國枝史郎　前田雀郎　藤村作　小出楢重　藤本卯之助　木村半文錢　赤井清司　柴谷柴舟　末弘嚴太郎　篠原春雨

## 社友

中川眼隱子　中野柳陽　中澤濁水　中見光路　本田柳一路　水田普門　牧田黃彩　辻左馬　和田源坊　白井梅里　清水光風　兼重白鷗　奥田雪緒　六角桂風　石川叉葉子　高橋かほる　高見柳骨　竹内多聞　詫間三猿堂　中島鐵洲　矢田冷刀　青山孤舟　朝田新水　主幹　麻生路郎

## 同人

伊藤綠之助　岩崎柳路　岩本素人　伊藤愚陀　淺井冷々子　藤井駒人　藤里好古　村加香　越麻生葭乃　松盛琴人　安井ひろし　川合舟々　橋本二柳子　龜井花童子　太田朝陽　水谷鮎美　長谷川一徹　北山悟郎　松丘町二　史風　原　萬よし

## 編輯局（同人）

## 客員

大阪市南區新戎橋南詰　道頓堀支部　幹事　庄　萬よし
大阪市北區北森町三十二　天滿支部　幹事　北山悟郎
大阪市外高石町羽衣　濱寺支部　幹事　太田朝陽
神戸市花隈町九六　神戸支部　幹事　楊井二南
山口縣山口町石原小路　山口支部　幹事　柳川洲馬
東京市外杉並町高圓寺八二三　東京支部　幹事　岩崎柳路
函館市青柳町五〇　函館支部　幹事　龜井花童子
朝鮮仁川仲一丁目八　仁川支部　幹事　矢田冷刀
松江市堂形　松江支部　幹事　奥田雪緒
石川縣小松町猫橋詰　小松支部　幹事　本田柳一路
高知市本與力町　高知支部　幹事　中澤濁水
大阪市此花區櫻甲町二丁目七九　梅田支部　幹事　水谷鮎美
大阪市外阪急沿線刀根山療養所內　螢ヶ池支部　幹事　牧田普門
金澤市八幡町五三　金澤支部　幹事　中川眼隱子
大阪市東區糸屋町二丁目七　糸屋町支部　幹事　川合舟々
和歌山縣田邊町幽靈松下　田邊支部　幹事　辻左馬
島根縣簸川郡高松村　簸川支部　幹事　伊藤綠之助
豐橋市外牟呂二二一　豐橋支部　幹事　白井梅里
神奈川縣平塚町旭座前　平塚支部　幹事　酒井駒人
加古川市大川町　加古川支部　幹事　水田黃彩
京都市七條大宮東入　京都支部　幹事　桑原京郎
山口縣防府町宮市八王子町　富岡支部　幹事　兼重白鷗
鳥取市川端町一丁目　鳥取支部　幹事　中島鐵洲
大阪市東區北濱一丁目一六竹內方　北濱支部　幹事　六角桂風
別府市驛前通り　別府支部　幹事　詫間三猿堂
堺市大町四三丁目十三　堺支部　幹事　友淵貴山
松山市外祝谷　松山支部　幹事　淺井冷々子
大阪市外守口町車庫裏　守口支部　幹事　朝田新水
大阪市東區農人橋二丁目二六　御旅支部　幹事　櫻井如一

## 讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾册か求めるうちには幾册かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路邨生）


**古本**

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

**桃太郎の研究**

洋裝美本 全一冊

定價 五十錢 郵稅 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

**公立社書店**

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

# 清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年四月二十五日印刷納本　昭和四年五月一日發行

川柳同好者並初心者の好伴侶

川上三太郎先生編　□最新刊□

# 新川柳大觀

四六新型五百頁用紙コットン
函入豪華裝飾本

定價　一圓五十錢
送料　十錢

川柳壇の第一人者として夙に名聲を馳せたる三太郎川上先生の努力の結晶として成れるものにして明治より大正、昭和に亘る佳唱名吟約一萬、類題千參百を算する川柳名句寶玉集にて一面明治、大正、昭和の一大風俗史たり。卷頭の川柳寸劇四篇又誌上を花ゝ飾る。――編者自ら知人に宛てたる一節に曰く

「次に小生三年以前より新川柳大觀の編纂に志し、爾來材料の蒐集、句稿の整理に努力中の所、此の程愈々完成出版の運びとなりました。此の新川柳大觀は明治、大正、昭和の三時代に於ける名句名吟を悉くピンセットで選り上げたもので、量の上からは三時代の三冊合本、內容から言へば明治、大正、昭和の名句寶玉集、社會的に言へば上記三時代の一大新風俗史であります。但し小生は單に之れを編輯したに止り、此等の誇りは總べてこの中にはめられた一句一句が持つて居るのであります。從つて以上は一片の空虛なる自誇自讚ではありません云々」……

同好の士よ須らく一本を机上に具へ給はらん事を

發行所　東京淺草區新旅籠町　振替口座東京三七〇五　草文社